

# Bernard Blochの*Spoken Japanese*に関する研究

## — その成立の時代的背景 —

### Study on Bernard Bloch's '*Spoken Japanese*'

池 田 菜採子

Natsuko IKEDA

#### 1. はじめに

アメリカの言語学者Bernard Blochには、池田（2012）（2013）で言及した研究業績とは別に、*Spoken Japanese*（以下、SJと略す）という日本語教育上の業績がある。本稿の目的は、SJについてその概要を紹介することではなく、SJが成立した時代的背景を詳しく述べることにある。

B.Blochの生きた時代は、構造言語学が興り、それが発展していく最中である。太平洋戦争が開始する1941年のころ、外国語教育への関心が軍隊の中で目覚めた。それに呼応して、構造言語学者たちが言語教育に協力する事業を始めた。SJは其中で対日本への戦略の一つとして生み出されたものである。対中国、対オランダに対しては、*Spoken Chinese*, *Spoken Dutch*がある。当時の言語学者集団が、戦争遂行という目的に協力して行った教育事業を、SJを中心にしてみらかにしたい。

#### 2. 日本におけるB.Blochの引用

Blochの日本語論のうち、*Reading in Linguistics I*に掲載されているものは次の2つである。

*Studies in Colloquial Japanese II: Syntax*. (1946) (以下II: Syntaxと略す)

*Studies in Colloquial Japanese IV: Phonemics*. (1950) (以下IV: Phonemics)

このほかにも日本語の、特に活用を取り扱った論文が2つある。

*Studies in Colloquial Japanese: I: Inflection*. (1946) (以下I: Inflection)

*Studies in Colloquial Japanese: III: Derivation of Inflected Words*. (以下III: Derivation of Inflected Words)

はじめに、日本においてこれまでBlochの論文がどのように引用され研究されてきたかについて、主要な論文を簡単に整理しておきたい。

##### 2-1. I: Inflectionからの引用

BlochのI: Inflectionが、日本でどのように受容されてきたかについては、池田（2012）の3章「Bernard Blochの継承と評価」で既に述べているので、ここではその部分からの引用という

形で紹介する。

Blochの活用論を日本で最初に紹介した人物は、英語学者の太田朗（1956）であると言われている。太田が紹介したBlochの活用を整理し、それを踏まえた上で新式活用表を提案したのが三上章（1972）である。このあたりの事情について、三上（1972:23-24）は次のように述べている。

(2-1)

『英語教育』（開隆堂）に、太田朗さんが、構造言語学者B.Blochの活用表を紹介しておられる。Blochは、変格動詞以外のすべての動詞を母音動詞（例、食ベル）と子音動詞（例、待ッ）との二種類に分ける。そして変化形を次のように並べて整理する。（中略）太田さんはBlochの方法を推賞した後で、「このような文法は日本人でも考えた人があるそうであるが、私は知らない」と書き添えておられる。この次には、日本文には主述関係が存在しないことを、アメリカの学者から教わるようになるだろう。

三上（1972:23-24）

Blochにも三上にも師事した経歴を持つ寺村秀夫（1984）もまた、Blochの活用をもとに自身も新しい活用表を提案した。寺村（1984:36-37）は次のように述べている。

(2-2)

ブロックの活用表は、戦時下の悪条件の中で、しかも短期間に作り上げられたものとして驚嘆に値する。当時、そしてその後も数多くの日本語学者から出されたどの活用表案に比べても、欠点の少ない見事なまとめ方だと思う。戦後アメリカでの日本語研究、日本語教育に指導的役割を果たしてきたS.マーティン、E.H.ジョーデンなども、活用の体系づけ、活用形の名付けについては、基本的には上のブロックの考えを受け継いでいる。

寺村（1984:36-37）

また、Shibatani（1990:226-227）は活用研究の歴史を説明する中で、Blochの活用論について次のように述べている。

(2-3)

Such consistency is obtained in the analysis of the American structuralist Bernard Bloch (1946), who applied the technique of segmentation fairly thoroughly to phonemically transcribed inflected forms of verbs, adjectives, and the copula. Bloch's analysis, which recognizes ten inflectional endings, has been quite influential among students of Japanese in America, e.g. Eleanor H. Jorden, Samuel E. Martin, and Roy Andrew Miller, who basically subscribe to the paradigm.

（拙訳）分節の一貫性は、アメリカの構造主義言語学者Bernard Blochによって得られた。Blochは動詞、形容詞、コピュラ（繫辞）の活用形を、音素の観点から完全に公平に分節するテクニッ

クを応用した。Blochの分析は10の活用語尾を認めている。Blochはジョーデンやマーティン、ミラーなどに影響を与え、彼らはBlochの活用パラダイムを基本的に踏襲した。

Shibatani (1990: 226-227)

また、池田(2013)は、Blochの活用論成立の背景にどのような先駆的研究があったかを探る研究を行った。

## 2-2. II: Syntaxからの引用

佐藤喜代治(1966:2)は、言語の形式と意味に関する研究の中で次のように述べ、BlochのII: Syntaxを取り上げた研究を行った。

(2-4)

アメリカで発達した構造言語学が言語における意味の側面を排除し、外形にたよって言語の構造を究明しようとしてゐることは繰り返し述べられてゐるところであつて構造言語学の最も大きな特色である。(中略)その理論を日本語に当てはめた場合にどうなるかといふことが現在私にとって問題なのである。(中略)端的な事例としてBernard Blochの日本文法についての研究をここに採り上げてみようと思ふ。Blochの日本語に関する論文のうち、ここで問題にするのはStudies in Colloquial Japanese II: Syntax.である。

佐藤(1966:2, 表記は原文のまま)

Blochの最も特徴的な分析である「Isya no ozi」の「no」を、Copula(繫辞)とみるかParticle(助詞)とみるかについて、記述文法と教育文法の両面から取り上げた研究には、藤原(2010)がある。藤原(2010)では、「no」に関してII: Syntaxからの引用が見られる。

(2-5)

[Footnote 45] Since no, the alternant of the copula, is homonymous with the referent particle no ‘of’, some expressions are ambiguous, Isya no, ozi means ‘my uncle, who is a doctor’ if no is the copula, but ‘the doctor’s uncle’ if no is the particle. Since the head of each expression is the noun ozi ‘uncle’, there is no way of distinguishing them except by meaning. To analyze a sentence A no B (Where A and B are noun), we apply the following semantic test: if the statement A da ‘someone or something is A’ provides a description of B, then no is the copula; if not, it is the particle.

(拙訳) コピュラ(繫辞)の「の」は、所有格を表す助詞「の」と同じ音なので、表現によっては多義的になるものが出てくる。「医者(イサ)の叔父(オジ)」という表現は、「の」がコピュラであれば「医者である、私の叔父(筆者注: 医者=叔父)」となるが、「の」が助詞であれば「医者(イサ)の叔父さん(筆者注: 医者≠叔父)」となる。こうした表現の主要部は、名詞の「叔父」であるので、両者を区別するには意味に頼るしかない。「AのB」(AとBは名詞)という文を分析するためには意味的検査を行い、もし「Aだ」という陳述が「誰か、もしくは何かがAである」であれば、

それはBの説明であり、この場合「の」はコピュラ（繫辞）である。そうでなければ、その「の」は助詞である。

藤原（2010:55）

## 2－3．Ⅲ: Derivation of Inflected Wordsからの引用

Ⅲ: Derivation of Inflected Wordsから引用が見られる研究は、現在のところ見当たらない。

## 2－4．Ⅳ: Phonemicsからの引用

服部四郎（1960:255-256）では、Ⅳ: Phonemicsから次のような引用が見られる。

(2-6)

ブロック博士の「東京土着の教育ある人々の言葉」のアクセントに関する説によると（中略）「日本語における観察し得る高さ変動を完全に記述するためには、四つの音素的に異なる水準が必要であり、それで十分である」として、それらの「高さ音素」（pitch phoneme）を表わす記号を次のようにきめている。

/1/ 最高の高さ /2/ 高い中ほどの高さ /3/ 低い中ほどの高さ /4/ 最低の高さ

そして、[kimonoŋayonoreta] というphraseが、[ki] が/4/に、[mononayonore] が/3/に、[ta] が/4/に属し、[aoi] というphraseは、[a] が/4/、[o] が/2/、[i] が/4/に属する、という。

服部（1960:255-256）

そのほか、文化庁（1971:37）『音声と音声教育』ではBlochがⅣ: Phonemicsで表した日本語の全ての異音が表で引用されているほか、音素と異音の関係が同前書（1971:43-52）で検討されている。また、池田（2014）は、BlochがⅣ: Phonemicsで示した日本語の音声表記をもとに、母音の無声化に関する研究を行った。

以上が、Blochの諸論文から引用が見られる主な研究である。Bloch研究は決して多くはないが、Ⅰ: Inflectionは活用論の観点から何度か引用されてきてはいる。しかし、三上や寺村に比べると、Blochの日本語教育への貢献に対する評価は、その大きさに比してまだ不十分であるというのが実情である。

次に、SJから引用が見られる研究を挙げてみようと思う。

## 2－5．*Spoken Japanese*からの引用

関正昭（1997:98）は、SJの存在には言及している。

(2-7)

…イエール大学でも1943年から大規模な日本語訓練プログラムが設けられた。その時の担当主任はB.ブロック（B.Bloch）で、構造言語学に基づくすぐれた日本語研究論文をつぎつぎに発表し、日本語学習書『*Spoken Japanese*』を編集した。その補佐役に、『*Beginning Japanese*』を著し、戦後の日本語教育界でも「ジョーデン方式」として有名になったジョーデン（E.Jorden）



がいたことはよく知られるところである。

関 (1997:98)

しかし、関 (1997) はSJについてこれ以上は触れていない。*Beginning Japanese*を「オーディオ・リンガル・アプローチに基づく初めての日本語初級教材で、日本国内の日本語教育にも強い影響を与えた」(関1997:202)と書いていることと比べると、SJの扱いはあまりにも少ない。

高見澤孟 (2005:7) は、「E.H.ジョーデン女史の日本語教育への貢献」の中で、次のように述べている。

(2-8)

ジョーデンが関与した最初の日本語教育は、1944年ごろの米陸軍特殊訓練計画 (ASTP) であったと思われる。そこで使われていたテキストは、当初、戦前に日本で刊行された長沼直兄の『標準日本語読本』であったが、この「漢字仮名混じり文」からなる読本をどのように教えていたかは、明らかではない。ASTPは、本来口頭言語能力の育成を目指していたので、遅ればせながら会話用テキストとして開発されたのが、1945年に米国戦争省から出版されたブロックとジョーデンの共著による*Spoken Japanese I & II*である。

高見澤 (2005:7)

高見澤 (2005:8) は、また次のようにも述べている。

(2-9)

…*Spoken Japanese*は、音声教育を重視した会話用テキストで、SECTION Aで導入を行い、SECTION Bで、その用法練習を行い、SECTION Cで、さらにその用法の範囲を拡大する方法が採られていた。導入のためのSECTION AのBasic Sentencesの教え方は、Audio-Lingual Approachが開発される前の1940年代中ごろの教授法としてはかなり特徴的であった。

まず、①各文章別に発音練習を行うが、これは学習者が「受け入れ可能な正確さ」で話せるようになるまで続けられるが、後のAudio-Lingual Approachのような「母語話者並みの正確さ」を求めるものではなかった。それに続き、②発音練習を済ませた文章の内容についての質問を行い、その理解を確認する方法が採られていた。

高見澤 (2005:8)

高見澤 (2006:83-84) では、SJのガイドのために書かれたマニュアルからの引用も見られる。

(2-10)

戦後の1945年12月に戦争省が刊行した*Guide's Manual for Spoken Japanese*に収められている「陸軍特殊訓練計画のテキスト使用の基本方針」では、日系米人の訓練担当官の役割や教授法の原則などが日本語で説明されている。ここからも、当時の陸軍の日本語教授法、いわゆるアーミー・メソッド (Army Method) の一端が窺えると思う。

＜Guide's Manual for Spoken Japaneseの序文からの引用＞（原文は、縦書き、表記は旧仮名および旧漢字使用であったが、本稿では、横書きとし、新仮名および新漢字表記などに適宜改めた。文構成は原文のままとした。）

＜訓練担当官への指示1 — 発音矯正の原則＞

これらの米国人達（筆者注：＝語学兵）は日本語で日常の談話が出来るようになるために日本語の会話の勉強を始めようとしているのであります。そのためには貴方に助力していただかなければならないのであります。

貴方の役目は日本語を発音して模範音を示し、彼等にそれを聴き取らせて同じように言わせる事です。彼等の発音には深く注意を払って聞き、間違った発音をした場合には根気よく、又、気持良く、何度でも訂正して上げて下さい。

ある言葉を不正確に又、不明瞭に発音した場合はこれを正しく日本語らしく発音する事が出来るようになるまでは何度でも繰り返して言わせて下さい。ここで注意すべき事は幾回、繰り返して言わせるにしても先ず貴方が模範音を示し、その後で学生に言わせるようにしなければなりません。

貴方に何を言っているか分かるだけでなく日本人の誰が聞いても分かるようになるまで、繰り返して言わせてください。

高見澤（2006:83-84）

以上、SJに関する引用が見られる主な研究を紹介した。このようにSJの先行研究では、SJの存在、SJがどう使われていたかということへの言及は見られるものの、SJ本文を詳しく考察した研究はいまだ行われていない。

### 3. *Spoken Japanese*の概要

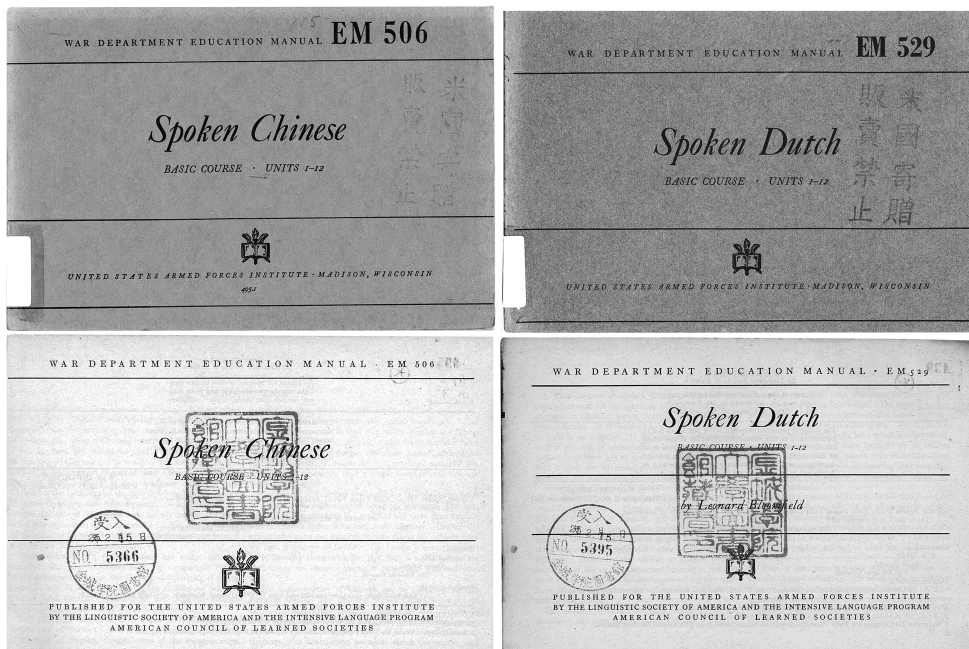
SJは、これまでに少なくとも3回出版されていることがわかっている。

次ページ上の図1はSJの‘Armed Forces Edition’である。これは戦時中、アメリカの軍人に日本語の口語を教える目的で開発された教科書である。Bernard BlochとEleanor Harz Jordenの共著で米国戦争省から出版された。著者の下に‘with the collaboration of Mikiso Hane, Toshio Kono, and others’と書かれているが、彼らはインフォーマントである。ただし、UNIT 1-12の方は‘Mikiso Hane’、UNIT 13-30の方は‘Kikiso Hane’となっているが、正しくは‘Mikiso Hane’である。このただし書きはSJの‘Armed Forces Edition’のみに見られるものである。2章で高見澤が引用したSJはこの‘Armed Forces Edition’である。この版には教科書が2冊と、蓄音機用のレコードが付いていた。

図1のSJには、それぞれ右肩にEM 561、EM 562という数字が書かれているが、このEMとは‘War Department Education Manual’の略である。EMは、‘The material presented herewith is for use as an aid in instruction in certain educational activities of the armed forces’ (*Spoken Japanese* : ii) (拙訳：この教材は軍隊の教育活動の助けとして使われるものである)と説明されているように、軍人の教育のためにアメリカ戦争省が用意した教材シリーズである。このEMには通し番号が付しており、例えば次ページ下の図2のように、*Spoken Chinese*のUNIT 1-12がEM506、*Spoken*



【図1<sup>1)</sup> : *Spoken Japanese* の 'Armed Forces Edition', 上の段は表紙, 下の段は扉】



【図2<sup>2)</sup> : *Spoken Chinese* と *Spoken Dutch* の 'Armed Forces Edition', 上の段は表紙, 下の段は扉】

- 1) 図1のSJは、京都産業大学図書館に所蔵されている。著作権はLinguistic Society of Americaが保有している。画像はLinguistic Society of Americaの許可を得て、ここに掲載するものである。
- 2) 図2は、金城学院大学図書館に所蔵されている。著作権はいずれもLinguistic Society of Americaが保有している。画像はLinguistic Society of Americaの許可を得て、ここに掲載するものである。

*Dutch*のUNIT 1-12がEM529といった具合である。後に詳しく述べるが、この*Spoken Dutch*はLeonald Bloomfieldによって書かれたものである。そのほか、2章で紹介した*Guide's Manual for Spoken Japanese*はEM 563、*Spoken French*のUNIT 1-12がEM 500、UNIT 13-30が501、*Spoken Spanish*のUNIT 1-12がEM509、*Spoken Portuguese*のUNIT 1-12がEM512であったことがわかって

いる。

EMは語学教材だけではなくた。表1は金城学院大学図書館、南山大学図書館に所蔵されているEMの一部を取り出したものである。100番台～900番台までであるようだが、300番台は両図書館では見つからなかった。このようにEMにはSJのような語学教材のほか、*Shakespeare*のような文学、また農場経営、数学、歴史など広い分野をくまなくカバーする豊富な教材が準備されていた。

【表1：War Department Education Manualの豊富な教材】

EM 125	Principles and types of speech
EM 130	Shakespeare Twenty-three Plays and the Sonnets
EM 219	World history
EM 230	Economic geography
EM 478	Principles of abnormal psychology
EM 500, 501	Spoken French
EM 506	Spoken Chinese
EM 509	Spoken Spanish
EM 512	Spoken Portuguese
EM 529	Spoken Dutch
EM 610	Art through the ages
EM 728	Essentials of business arithmetic
EM 754	Principles of business law
EM 767, 768	Accounting principles
EM 800	What is farming?
EM 826	Crops
EM 972	Mathematics essential to electricity and radio (with answers)

EMについての先行研究は特に見当たらず、一体何冊ぐらいのEMが準備されていたのかなど今後研究してみたい課題である。

SJは‘Public Edition’として1945年にHenry Holt and Companyから出版された。これはEMの中から語学教材だけを取り出し、Holt Spoken Language Seriesとして新たに、民間人向けに出版されたものである。次ページの図3は‘Public Edition’のSJと*Spoken Russian*である。この*Spoken Russian Book Two*もまたLeonald Bloomfieldによって書かれたものである。

本稿で考察するのは、このHolt社の‘Public Edition’である。この版には、教科書が2冊と、蓄音機用のレコード、またHolt社が編集したと思われる*SPOKEN JAPANESE: a MANUAL and KEY for your Spoken Language Course*という薄い冊子が付いていた。





【図3<sup>3)</sup> : Holt社の*Spoken Japanese*と*Spoken Russian*, 上の段は表紙, 下の段は扉】

SJの‘Public Edition’では‘Armed Forces Edition’の誤植が修正され、GENERAL FOREWORDとAUTHOR’S PREFACEが付け加えられているが、そのほかの部分において両者の内容に大きな違いは見られない。

また、1972年には‘Public Edition’の復刻版がSpoken Language Servicesから出版されている。この版には、教科書が2冊とカセットテープが付属していたようである。

本稿では、以下これらの教科書をまとめて言及する際、‘Spoken Language Series’と呼ぶことにする。

SJが書かれた時代背景について、SJのGENERAL FOREWORDでは次のように述べられている。

### (3-1)

Early in 1942, within a month of Pearl Harbor, the Joint Army and Navy Committee on Welfare and Recreation began consideration of the means whereby large numbers of troop might be instructed in the colloquial forms of the numerous languages spoken in the areas in which they were likely to be employed. ...Consequently, the first necessity was a program of basic implementation which would provide materials, as nearly uniform throughout the various idioms as practicable, for elementary teaching of spoken language to Americans without special linguistic training or, indeed, aptitude....Prosecution of

3) 図3は、南山大学図書館に所蔵されている。著作権はいずれも Linguistic Society of America が保有している。画像は Linguistic Society of America の許可を得て、ここに掲載するものである。

the war created the need for these materials to teach *spoken* language.

（拙訳）1942年初頭、真珠湾が攻撃を受けてからほどなく、陸海軍合同委員会は、多くの兵士が雇われることになる地域で話されている数多くの言語の話し言葉で彼等に命令する手段を考え始めた。その結果、特別な訓練も適性もないアメリカ人に話し言葉の初歩が教育可能になるように、さまざまな語法をほぼ同じような構成で教える教材を提供する、基礎的な実行プログラムが第一に求められた。…戦争の遂行は話し言葉を教える教材の必要性を産み出したのである。

Bloch (1945c: II -A-B<sup>4)</sup>)

話し言葉を習得するために、ネイティブスピーカーの発音を模倣し、Basic Sentencesを暗記するまで何度も繰り返し発音しながら練習する方法がとられていた。SJの基本的信念として、BlochはAuthor's prefaceの中で次のように述べている。

(3-2)

…principles, briefly stated, are the following.

- ① The study of the language itself – that is, of speech – should precede the study of orthography.
- ② The student learns best by imitating the utterances of a native speaker.
- ③ The student should memorize a stock of typical sentences in the foreign language and practice their use before he studies the grammar.
- ④ From the very first day of the course, the student should be encouraged to use the foreign language in actual conversation.

（拙訳）この本の信念を簡単に述べると、次のようなことである。

- ①言語を書く学習よりも、話す学習が優先されるべきである。
- ②学習者はネイティブスピーカーの発話を真似することが、最もよい学習法である。
- ③学習者は外国語の典型的な文のストックを暗記し、文法を勉強する前に、用法を練習するべきである。
- ④コースの初期段階から、学習者は実際の会話で外国語を使うようにするべきである。

Bloch&Jorden (1945c: ii -E)

SJは、BOOK ONEにPART ONE, PART TWOが収録され、BOOK TWOにPART THREE, PART FOUR, PART FIVEが収録されている。各PARTは6ユニットから成り、全体で30ユニットから構成されている。以下は目次からの抜粋である。

---

4) この部分はGENERAL FOREWAORDからの引用であり、Bloch自身が書いたというわけではない。

<BOOK ONE>

【PART ONE】

GENERAL FOREWORD

AUTHOR'S PREFACE

INTRODUCTION

Unit 1. GETTING AROUND

Unit 2. MEETING PEOPLE

Unit 3. TRADES AND OCCUPATIONS

Unit 4. ABOUT THE HOUSE

Unit 5. THE WEATHER

Unit 6. REVIEW

【PART TWO】

Unit 7. COUNTING

Unit 8. ASKING DIRECTIONS

Unit 9. MORE NUMBERS

Unit 10. THE FAMILY

Unit 11. GETTING DRESSED

Unit 12. REVIEW

<BOOK TWO>

【PART THREE】

Unit 13. THE THEATER

Unit 14. THE HOSPITAL

Unit 15. THE POST OFFICE

Unit 16. SPORT

Unit 17. THE BANK

Unit 18. REVIEW

【PART FOUR】

Unit 19. SHOPPING

Unit 20. OFFICE WORK

Unit 21. FARMING

Unit 22. MARRIAGE

Unit 23. IN TOWN

Unit 24. REVIEW

【PART FIVE】

Unit 25. BUILDING A HOUSE

Unit 26. MILITARY

Unit 27. GEOGRAPHY

Unit 28. GOVERNMENT

Unit 29. JAPANESE CUSTOMS

Unit 30. REVIEW

APPENDIX I . SUMMARY OF INFLECTED FORMS

APPENDIX II . NOTE ON THE SPELLING OF JAPANESE

ENGLISH-JAPANESE GLOSSARY

JAPANESE-ENGLISH GLOSSARY

INDEX TO THE NOTES

このようにSJは,「職業」,「天気」,「家族」の話題のほか,「映画館で」,「病院で」,「郵便局で」というように, いずれも日常会話が想定される場面を考慮して構成されている。同時代にアメリカで使われていたNaganuma (1958)がLesson.43で「リンカーン」を, Lesson.50で「馬泥棒の話」



を取り上げられているのに比べると、SJははるかに日常会話に即した内容と言えよう。  
各Unitの構成は、Unit2. MEETING PEOPLEを例にとれば、次のようである。

<Unit 2. MEETING PEOPLE>

[Section A]

1. Basic Sentences
2. Pronunciation Practice
3. Practice on the Basic Sentences
4. Review of the Basic Sentences: Covering the English
5. Notes
6. Exercise
7. Check-Up on the Exercise
8. Review of the Basic Sentences: Covering the Japanese

[Section B]

1. Basic Sentences
2. Pronunciation Practice
3. Practice on the Basic Sentences
4. Review of the Basic Sentences: Covering the English
5. Notes
6. Exercise
7. Check-Up on the Exercise
8. Review of the Basic Sentences: Covering the Japanese

[Section C]

1. Final Check-Up
2. Listening In
3. Free Conversation

このうち、Section A、Section Bの2.Pronunciation Practiceでは、次のような項目が記述され、集中的な発音練習が行われた。

Unit 1	Section A	Comments on the Japanese spelling
	Section B	The Vowels a,e,i,o,u
Unit 2	Section A	Double vowels
	Section B	The consonant ñ
Unit 3	Section A	Other consonants; g,h,r
	Section B	The consonants s,t,z
Unit 4	Section A	Consonant plus y; ry, sy, ty, zy
	Section B	Double consonants

Unit 5	Section A	Loss of i and u
	Section B	The accent

例えば, 「ん」は, 次のように説明された。

(3-3)

A LABIAL consonant is one that is made by touching the two lips together; p and b are labials. Before one of these consonants,  $\bar{n}$  is changed to a labial also, being pronounced like the 'm' in 'umpire' and 'ambush', but longer.

A DENTAL consonant is one that is made by touching the inner surface of the upper teeth with the tip of the tongue; Japanese t, d, s, and z are dentals. ... Before one of these consonants, the  $\bar{n}$  is changed to a dental also, being pronounced approximately like the 'n' in 'on time', 'undo', 'unsafe', and the like, but longer.

A VELAR consonant is one that is made by touching the back part of the roof of the mouth... with the back part of the tongue; k and g are velars. Before one of these consonants, the  $\bar{n}$  is changed to a velar also, being pronounced like the 'n' in 'anchor' and 'anger', but longer.

PRACTICE 9.

sānpun̄.....three minutes

Konban̄ wa.....Good evening

gūntai.....army

Nān desu ka? .....What is it?

sensoo.....war

benzyō.....toilet

gēnki.....health

Pān ga arimasu.....There is bread.

(拙訳) 両唇音は, 唇を合わせて作られる音で, pとbは両唇音である。この音の前で  $\bar{n}$  もまた両唇音になり, 'umpire' や 'ambush' の 'm' のように発音されるが, 長く引き伸ばす音ではない。

歯茎音は, 上の歯の内側の表面と舌先をつけて出す音であり, 日本語のt, d, s, zは歯茎音である。(中略) この音の前で  $\bar{n}$  もまた歯茎音になり, 'on time' や 'undo', 'unsafe' の 'n' のように発音されるが, 長く引き伸ばす音ではない。

軟口蓋音は, 舌の後ろの部分で, 口の天井部後方につけて出す音であり, kとgは軟口蓋音である。この音の前で  $\bar{n}$  もまた軟口蓋音になり, 'anchor' や 'anger' の 'n' のように発音されるが, 長く引き伸ばす音ではない。

Bloch&Jorden (1945c:40)

Bloch (1945c: ii -F) が ‘As in all the books of the series, the comments on pronunciation are based on a thorough phonetic and phonemic analysis of the sounds of the foreign language’（拙訳：他の Spoken Language Series と同様に、発音の解説は、外国語の音の音声的音素的分析をもとにしている）と書いているように、構造言語学の手法を取り入れた分析である。日本語についてこの分析を行い学習者に提示したという、この1点のみをもってしても、Blochの日本語教育上の業績はもっと評価されるべきではなかろうか。

ただ、Blochは発音練習がUnit 1 からUnit 5 にかけて点在していることについては、それがこのテキストの編集方針であったとはいえ、賛成できないという旨を述べている。

(3-4)

Two features, which again the book has in common with other members of the series, we deprecate, especially in a public edition. One is the piecemeal treatment of pronunciation, scattered bit by bit through the first five units....but we think it would have been better to describe the pronunciation of Japanese in a connected way at the very beginning of the book, perhaps making this the chief task of the first unit, than to leave the students in evitable questions partly unanswered until Unit 5.

（拙訳）このシリーズのほかのテキスト全てに共通することではあるのだが、特にこのパブリックエディションにおいては、発音練習が始めの5ユニットに少しずつバラバラに散在していることには賛成できない。…日本語の発音をわかりやすい方法で、もっと早い段階で、例えば一番始めのユニットの主要な課題として説明すべきだったと思う。ユニット5まで学習者の不可避の質問に答えないままにしておくべきではなかった。

Bloch&Jorden (1945c: ii -F)

Notesは文法解説で、例えばUnit 2 のNotesでは次のような項目が説明された。

- 2.1. Particle no
- 2.2. Particle ga at the end of a clause
- 2.3. ‘I’ and ‘you’ and ‘he’
- 2.4. Copula: affirmative and negative
- 2.5. Verbs and copula: no change for person and number
- 2.6. Bound forms: -sañ, -ziñ
- 2.7. Japanese names
- 2.8. Particles kára, máde, e, de
- 2.9. Alternative questions
- 2.10. Arimásu and imásu
- 2.11. Interrogatives
- 2.12. Watakusi nó desu
- 2.13. Particles ga and wa

口語を緊急にマスターする必要性から、SJはかな混じり文ではなく、ローマ字表記を採用した。そのためSJでは平仮名、片仮名、漢字は1度も使われていない。例えば、Basic Sentencesは次のように示された。

(3-5)

Anó hito wa, dāre desu ka?

Ano matí kara, kono matí made kimásita.

Watakusi no tomodati wa, Eikoku kara kimásita.

Bloch&Jorden (1945c:26-27)

ここで使われている表記は、Blochがほかの日本語論で用いたのと同じ表記であるが、これについてBlochは次のように説明している。

(3-6)

The Japanese spelling used in this book is a modification of the spelling officially adopted by the Japanese government in 1937 (Kokutei Rōmazi). The official spelling differs from ours in three respects:

1. The double vowels aa, ee, oo, and uu are written ā, ē, ō, and ū; but ii is written ii.
2. The sound ñ is written n.
3. The accent is not marked.

(拙訳) この本で使われている日本語の綴りは、1937年に日本国政府が公式に採用した綴り（国定ローマ字）を改良したものである。ただし国定ローマ字は、われわれの方式と以下の3点で異なる。

1. 二重母音aa, ee, oo,uuは、国定ローマ字ではā, ē, ō, ūと書かれる。ただしiiはそのままiiである。
2. 鼻音 ñ は国定ローマ字では n と書かれる。
3. 国定ローマ字では、アクセントは表されない。

Bloch&Jorden (1946:918)

ヘボン式ローマ字ではなく国定ローマ字を選んだ理由として、Blochは、次のように述べている。

(3-7)

...anyone who tries to use it in an orderly presentation of Japanese grammar will find himself – and the student – in trouble. Teachers of Japanese will see at once that the parallelism between the verb forms tór-u ~ tór-i ~ tor-ánai, dás-u ~ dás-i ~ das-ánai, mát-u ~ mát-i ~ mat-ánai is badly obscured by the spellings dashi, matsu, and machi; other examples that will occur to them are the relations of nigori and the formation of words containing numerals.

（拙訳）日本語の文法の規則的な現象を、ヘボン式ローマ字を用いて説明しようとしたら、いささかやっかいなことに気が付くだろう。日本語教師ならすぐに *tór-u ~ tór-i ~ tor-ánai, dás-u ~ dás-i ~ das-ánai, mát-u ~ mát-i ~ mat-ánai* の動詞形の間に相似的な関係があることに気づくだろうが、そのことは *dashi, matsu, machi* という綴りを使ってはうまく表すことができないのである。そのほかの例としては、数字を含む語において濁ったり濁らなかつたりする現象が挙げられる<sup>5)</sup>。

Bloch&Jorden (1945c: ii -H)

ここでBlochが用いた表記は、後にJordenが*Beginning Japanese*で使ったため、「Jorden方式のローマ字」と呼ばれることもある<sup>6)</sup>が、SJやBlochの日本語論でも使われていることなどから、Blochが考案した表記法であったとみてよいであろう。

SJの‘Public Edition’版には、テキストのほか蓄音機用のレコードと、*Spoken Japanese: a Manual and Key for your Spoken Language Course*（以下MKと略す）が付いていたことがわかっている。ただしMKは、後に考察するSpoken Language Series全てに付いていたもので、SJだけの付属資料ではないし、著者もBlochではないと思われる。また、蓄音機用のレコードは現在国内で入手できないため詳細は不明である。

MKは、どのように外国語を学習したらよいか、その方法が解説されている。これは戦後民間人が、戦前とは全く違う新しい方法で外国語学習を始めるにあたり、民間人向けに易しく書かれたものであろう。マニュアル部分はわずか16ページの薄いものであるが、可愛い挿絵が描かれていて、外国語学習が楽しくなるような工夫が見られる。民間人にとって、戦前までの語学学習は‘an appreciation of literature and culture’ (Darlan 1972:84-85)（拙訳：文化や文学の鑑賞）が目的であったので、ネイティブスピーカーを真似て実用会話を学ぶという語学学習法は、当時としてはとても斬新なものであったのだろう。

MKには、外国語学習では実用会話を学ぶことが何より大切だということが次のように書かれている。

(3-8)

The language in a Holt SPOKEN LANGUAGE course deals with practical, everyday situations. The U.S. Armed Services, who sponsored its preparation, insisted upon a spoken knowledge that would enable its personnel to talk with foreign civilians on normal, commonplace topics, such as “Getting Around”, “Meeting People”, “Seeing the Sights”, “Shopping”, “Eating”, and “Sprucing Up”.

There is no mention here of “the third cousin of your wife’s stepsister”, or similar nonsense, that used to mark the beginner’s course in a foreign language.

（拙訳）ホルト社の話し言葉コースが扱うのは、実用的な毎日の場面である。このコースのスポンサーである米国軍は、所属する軍人が外国の一般市民と、「近況」「交友」「観光」「買い物」

5) これは、1本、2本、3本…という音変化についての言及であろう。

6) 高見沢 (2005), p.5

「グルメ」「身なり」のようなごく普通のありふれた話題ができるようになる会話能力を求めた。これまでの外国語の初心者コースによく見られた「あなたの妻の継姉妹の3番目のいとこ」とか、そういった類のナンセンスな話題にはこの本では言及しない。

Unknown<sup>7)</sup> (1945:5)

以上考察してきたように、SJは実用的な話し言葉を習得することを目的に、ネイティブスピーカーや蓄音機レコードの発音を模倣し、Basic Sentenceを完全に暗記するまで繰り返し何度も練習するという手法がとられていた。

#### 4. Spoken Language Series成立の背景

SJが書かれた当時、アメリカの言語教育理論がどのようなものであったのか先行研究から考察していきたい。大戦前のアメリカの外国語教授法について、高見澤（2006:79）は次のように述べている。

##### (4-1)

米国では、建国以来、移民に対し、英語の習得を米国国民にすることの条件としてきたので、米国人が外国語を学習することにはあまり熱心ではなく、また、米国内に在住している米国人が外国語を使う必要性も大きくはなかったため、外国語学習に努力するのは一部の人々に限られていた。

このような事情から、19世紀にヨーロッパの影響で実施されるようになってきた直接法は、その効果に疑問をもたれ、20世紀に入ると、エクлекティック・メソッド（Eclectic Method, 折衷法）が採られていた。その後、1924年にカーネギー財団の支援を受け、外国語教育の実態調査が行われ、1929年にその調査結果をまとめたコールマン・レポート（‘Coleman Report’）が発表され、それによって米国の外国語教育の状況が明らかにされた。

そこで明らかになったのは、米国の外国語教育が①外国語の学習期間が通常2年であり、②外国語教育の教師自身がその言語のスピーキングの能力が不足している、という事実であった。このため、コールマン・レポートでは、米国の実情に合わせた外国語教授法として、読解を通して外国の文化や歴史を学ぶリーディング・メソッド（Reading Method）が推奨され、多くの教育機関がその方針に沿った外国語教育を行っていた。

しかし、米国陸軍が求めた外国語能力は、読解能力ではなく、口頭によるコミュニケーション能力であったので、新しい教授法を研究し、採用する必要があった。

高見澤（2006:79）

読解能力からコミュニケーション能力の養成へ、教育方針の転換は、次のDarian（1972:84-85）の記述のように図られた。

---

7) MKの著者は不明である。

(4-2)

The war brought a sudden demand for instruction in languages seldom taught previously. The linguists, who were consulted on methods of teaching, applied the same descriptive techniques in preparing materials as they had used in their earlier study of languages. These included a native informant, phonemic transcription, and the emphasis of speech over writing....From this emerged the ASTP, developed by a group of linguists under Henry Lee Smith, who produced a series of teaching materials, including manuals, dictionaries, and record. The objective of such a program was to train, in several months, men who could act as interpreters and perform other wartime tasks in which a knowledge of the foreign language would be extremely important....Whereas peacetime language teaching had aimed at an appreciation of literature and culture, the military goal was strictly pragmatic: command of the colloquial spoken form of the language in order to communicate directly with natives.

（拙訳）戦争は、これまでほとんど教えられてこなかった言語教育の必要性を突然もたらした。教育の方法を相談された言語学者は、以前言語研究で用いたのと同じ記述的方法を教材の準備のために使った。それらにはネイティブのインフォーマントを使うこと、音韻表記をすること、書き言葉より話し言葉を優先することなどが含まれていた。ここからASTPが出現し、それをヘンリー・リー・スミスの指導の下で言語学者グループが発展させた。彼らは、指導要領や辞書、レコードを含む一連の教材を作成した。こうしたプログラムの目的は、数か月間で通訳ができる人材、また戦時中の職務を外国語で遂行できる人材を作り出すことだった。…平和時の言語教育は、文学や文化の鑑賞を目的としていたが、軍隊の（言語教育の）目的は厳格に実用的であることだった。つまり、ネイティブスピーカーと直接コミュニケーションをはかることができるレベルの口語の運用力が求められたのである。

Darian (1972:84-85)

こうした教育方針の転換に大きな役割を果たしたのが構造主義言語学であったと、Stern (1983:157) は述べている。

(4-3)

The growth of structural linguistics in America played a crucial role in this change of attitude. Round 1940, the needs of an impending war had opened the eyes of American administrators to language problems that Americans, particularly in the armed forces, might be called upon to face. A group of linguists, under the leadership of the Linguistic Society of America, undertook to turn their experience in language description to the task of a 'linguistic analysis of each language to be taught, followed by the preparation of learning materials based on this analysis' (Moulton 1961:84). Within a few years manuals with such titles as Spoken Burmese or Spoken Chinese were composed. Many of the leading American linguists of this period were involved in the preparation of texts in this series, for example, Bloch(Japanese), Hall(French), Haugen(Norwegian), Hockett(Chinese), Hodge(Serbo-Croatian), Sebeok(Finnish, Hungarian), Hoenigswald (Hindustani), Moulton(German), and of the older generation Bloomfield(Dutch



and Russian). General principals were expressed in Bloomfield's *Outline Guide for the Practical Study of Foreign Languages* and Bloch and Trager's *Outline of Linguistic Analysis*.

(拙訳) アメリカでの構造言語学の発展は、(それまでの言語教育に対する) 姿勢からの転換にきわめて重要な役割を果たした。1940年ごろ、差し迫った戦争の必要性が、アメリカの執行部に、アメリカ人、とりわけ全軍隊に属するアメリカ人が直面せざるを得ない言語問題に気づかせた。アメリカ言語学会の指導の下で、言語学者たちが、言語記述の経験を「個別言語を教育用に分析する」ことに活かす試みを始めた。そして「言語分析の手法に基づいて学習用教材を準備した」のである。数年以内に*Spoken Burmese*や*Spoken Chinese*というタイトルのマニュアルが作られた。多くのアメリカの言語学者が、この期間このシリーズのテキストの準備に巻き込まれた。例えばBloch (日本語), Hall (フランス語), Haugen (ノルウェー語), Hockett (中国語), Hodge (セルビア＝クロアチア語), Sebeok (フィンランド語, ハンガリー語), Hoenigswald (ヒンドゥスターニー語), Moulton (ドイツ語) そして老齢のBloomfield (オランダ語とロシア語) などである。全体的な方針はBloomfieldの*Outline Guide for the Practical Study of Foreign Languages*及びBlochとTragerの共著*Outline of Linguistic Analysis*で示された。

Stern (1983:157)

Stern (1983:157) の記述から明らかなように、日本語以外にも多くの言語が研究され、名だたる構造主義言語学者たちによって各言語の教科書が編纂されていった。

構造主義言語学者の中でも、とりわけBloomfieldの果たした役割は大きかったようである。Stern (1983:157-158) は次のように述べている。

(4-4)

Linguists in the forties in America were fully aware of the fact that their role in language teaching and language course writing was a new experience for linguistics as well as for language pedagogy. There was little doubt in their minds that one must break with the traditions of conventional language teaching, especially in the teaching of 'exotic' languages. 'Start with a clean slate' wrote Bloomfield in his *Outline Guide*. ...Bloomfield suggested a professional and almost technical approach. A language, he argued, can only be learnt from a native speaker who acts as an informant, and who must be closely observed and imitated. ...Nevertheless, ideas derived from structural linguistics became the accepted doctrine which was more or less implemented in the American wartime language programmes.

(拙訳) 1940年代アメリカの言語学者は、自分たちの行っていることが、言語教育やコースの進め方において、教育方法にとっても言語学にとっても新しい経験であることに気が付き始めた。伝統的な言語教育を、特に「別世界」の言語教育において打破することに、少しも疑問を抱かなかった。「白紙の状態から始めよう」と*Outline Guide*の中でBloomfieldは書いた。(中略) Bloomfieldは専門的で技術的な方法を提案した。言語は、インフォーマントとして務めるネイティブスピーカーから学ぶべきである、学習者はインフォーマントをよく観察して真似しなけ

ればならない、とBloomfieldは述べた。（中略）構造主義言語学から生まれた思想は金科玉条となり、アメリカにおける戦争中の言語プログラムの中で程度の差こそあれ実行された。

Stern (1983:157-158)

Bloomfieldは*Language* (1933) の著者であるほか、アルゴンキン語の言語調査を行った人物としてはよく知られている。しかし、むしろ理論家として知られ、*Spoken Dutch*と*Spoken Russian*という2冊の教科書を執筆したこと、また*Spoken Language Series*の編纂、つまりASTP教授法に深く関与したことなど、教育者としての実績はあまり知られていない<sup>8)</sup>。高見澤（2006:82）も「…戦時中の国家的な事業であったので、当時の米国の多くの学者がその計画策定に関与したが、なかでもアメリカ言語学会の指導的立場にあったブルームフィールド（Leonard Bloomfield, 1887-1949）の理論的影響が大きかったと見られている」と述べてはいるが、彼自身が教科書を作成したことにまでは触れていない。

Bloch (1949:89-90) はBloomfieldがASTPで果たした役割について、次のように述べている。

(4-5)

It was during the last war that Bloomfield's concern for foreign-language teaching bore fruit. The history of the Intensive Language Program is familiar to most members of the Linguistic Society: how it was organized in 1941 by the American Council of Learned Societies to train teachers and prepare textbooks of strategically important languages; how it supervised the methods of instruction in the Army Specialized Training Program throughout the country; and how it published, through the Linguistic Society, a series of practical manuals written by trained linguists and applying the latest results of our science to the problem of teaching foreign languages. What is not so widely known is the part that Bloomfield played in these activities. Although he was not a member of the committees that nominally directed the Intensive Language Program, and remained by preference in the background of its operations, there is no one to whom the Program is more deeply indebted. The influence of his teaching is obvious in every phase of its work: many of the younger men and women who took part in it learned their trade from him or from his book *Language*; and he himself contributed no fewer than four works to the series which the Program sponsored. In 1942, when it was not yet clear what direction the Program take, he wrote one of the Program's two booklets on descriptive methodology: his *Outline guide for the practical study of foreign languages*, a brief but lucid statement of how the linguist works with an informant. Later he wrote three of the practical manuals: two for Dutch and one for Russian, devoting months of grueling work to the task. In addition, he found time and strength to prepare a grammatical introduction for the War Department's Russian dictionary.

（拙訳）Bloomfieldの外国語教育への関心が成果を上げたのは、さきの大戦の間であった。集中言語プログラムの経緯は、言語学会のメンバーには既によく知られている。1941年に

8) 例えばYale大学のHP (<http://ling.yale.edu/history/leonard-bloomfield>) にも、ASTPへの関与や*Spoken Dutch*, *Spoken Russian*などの業績は記されていない。

American Council of Learned Societiesによって戦略的に重要な言語の教科書の準備と教師の育成がどのようになされたか、国全体がASTPの教授法をどのように管理していたか、そして、外国語を教える問題についての最新の科学的な結果が適用され、訓練された言語学者によって書かれた実用的マニュアルが言語学会を通してどのように出版されたか。あまり知られていないことは、実は、これらの活動にBloomfieldが役割を果たしていたことである。彼は集中言語プログラムと呼ばれる委員会のメンバーではなかったし、好んで活動の表舞台に現れなかったが、プログラムはBloomfieldにこそ多大な恩を受けているのである。彼の教育の影響は、その出版物のあらゆる面によく表れている。このプログラムに参加した多くの若者は、その方法をBloomfieldとその著書*Language*から学んだ。また、彼自身、プログラムがスポンサーであるシリーズのうち、少なくとも4つの著書に貢献した。1942年、プログラムの方向性がまだはっきりしていなかった頃、彼は記述的方法論をもととした*Outline guide for the practical study of foreign languages*を執筆した。それは簡潔だが明快な記述で、言語学者がどのようにインフォーマントと接すればいいのかが書いてあった。のちに、彼は実用的マニュアルを3冊書いた。2冊はオランダ語、1冊はロシア語で、それらを執筆するために何か月もの時間を費やした。しかも、彼は軍部のロシア語の辞書を準備するだけの時間と強さも持っていた。

Bloch (1949:89-90)

Bloomfield (1942) は、わずか16ページの小さな冊子である。Bloomfield (1942:1) はこの冊子を書いた目的を次のように述べている。

(4-6)

It seems likely that from now on many Americans will have to speak and understand various foreign languages. Our schools and colleges offer instruction in some of these, notably in French, Spanish, Italian, and German; for other languages it is difficult or impossible to get formal instruction. This booklet is planned to help the reader to shift for himself.

(拙訳) これから多くのアメリカ人がいろいろな外国語を理解し、話さなければならなくなるだろう。我々の国の学校では、フランス語、スペイン語、イタリア語、ドイツ語などが教えられているが、そのほかの言語を教えることは難しいし、不可能である。この冊子はそうしたことを自力でやろうとする読者の助けとなるよう計画されたものである。

Bloomfield (1942:1)

Bloomfield (1942) は、外国語と英語を対応させて逐一訳出していくような従来の教授法を批判した。例えばbe動詞にぴったり当てはまる外国語訳は存在しないという例を挙げながら、英語という尺度で外国語を計ることはできないのだということを強調した。

(4-7)

Our schools and colleges teach us very little about language, and what little they teach us is largely in error. The student of an entirely new language will have to throw off all his prepossessions about language, and start with a clean slate. The sounds, constructions, and meanings of different languages are not the same: to get an easy command of a foreign language one must learn to ignore the features of any and all other languages, especially of one's own.

（拙訳）学校で言語について教えてくれることはとても少ないし、その少ないことでさえ大部分は間違っている。言語をこれから新しく勉強する学習者は、言語に対する先入観を捨てて、白紙の状態から始めなければならない。異なる言語では、音、構造、意味は同じではない。外国語の簡単な運用力を身につけるためには、他の言語、特に我々自身の言語（著者注：である英語）の特徴を無視するということを学ばなければならないのである。

Bloomfield (1942:1)

そして、次のような方法で外国語を習得することを提案している。

(4-8)

Imitate the native sounds.

Combine words as he combines them, not according to some theory of your own or according to the habits of the English language.

Remember always that a language is what the speakers do and not what someone thinks they ought to do.

Practice everything until it becomes second nature.

（拙訳）ネイティブスピーカーが出す音を真似しなさい。ネイティブスピーカーが結合するように、語を結合しなさい、英語の慣習やあなた自身の説によって結合してはいけません。言語とは、話者がすることであり、誰かがそうあるべきだと考えるものではないということを常に覚えておきなさい。第二の本性になるまですべてを練習しなさい。

Bloomfield (1942:16)

このように、Bloomfield (1942) が教授法を提案し、その方法に従ってBlochを始めとする構造主義言語学者らによって各言語の教科書が作成されていった。これらは戦後*Spoken Language Series*として出版された。Howatt (1984:267) は次のように書いている。

(4-9)

...It led, for example, to the production of a set of language courses called 'The Spoken Language Series' which included *Spoken Dutch* and *Spoken Russian* (both by Bloomfield himself), *Spoken Japanese* (Bloch), *Spoken Norwegian* (Haugen) and *Spoken Chinese* (Hockett). After the war, the work came under the general direction of the American Council of Learned Societies to which, it should be

recorded, the eminent authors of the Series donated their royalties in support of linguistic research.

(拙訳) ASTPは*Spoken Dutch*や*Spoken Russian* (どちらもBloomfield自身によって書かれた), *Spoken Japanese* (Bloch), *Spoken Norwegian* (Haugen), *Spoken Chinese* (Hockett) などを含む ‘The Spoken Language Series’ を産出した。戦後, こうした成果はアメリカ諸学会評議員会 (A.C.L.S) の指揮下におかれ, シリーズの著者たちは, その印税を言語学研究のために寄贈した。

Howatt (1984:267)

こうした教授法は, 後のオーディオ・リンガル法に影響を与えていく。Howatt (1984:266) は次のように述べている。

(4-10)

Both the senior instructors and the informants acted as classroom teachers. The former introduced the new material with any necessary explanations and then left the native speakers to drill the patterns by a simple method of imitation and repetition. This became known as the ‘mim-mem’ method (mimicry and memorization), and is the obvious forerunner of the audiolingual approach and the early language laboratory techniques.

(拙訳) 上席講師とインフォーマントと一緒に教師としてふるまう。上席講師が新しい項目に必要な説明とともに導入し, ネイティブスピーカーが模倣と繰り返しというシンプルな方法でパターンを練習する。これがミムメモ法 (模倣と記憶) として知られるようになった手法であり, 明らかにオーディオ・リンガル・アプローチと, 初期のLL授業の先駆けである。

Howatt (1984:266)

以上の考察から, SJを含むSpoken Language Seriesは, Bloomfield (1942) が示した方法と方向性に基づき, アメリカの構造主義言語学者が一丸となって作り上げたシリーズであることが確認された。またBloomfield自身も*Spoken Dutch*と*Spoken Russian*を執筆することで, 実際に教授法のモデルを示していたことが明らかになった。

## 5. Spoken Language Seriesの構成の類似性

1972年に出版されたSJの復刻版によると, Spoken Language Seriesには次の45言語があったようである。表2は, SJ (1972) の裏表紙からの引用である。

表2. 【Spoken Language Seriesのタイトル一覧<sup>9)</sup>】

SPOKEN ALBANIAN	SPOKEN GERMAN	SPOKEN PORTUGUESE
SPOKEN AMHARIC	SPOKEN GREEK	SPOKEN ROMANIAN
SPOKEN AMOY HOKKIEN	SPOKEN HAUSA	SPOKEN RUSSIAN
SPOKEN ARABIC (IRAQI)	SPOKEN HEBREW	SPOKEN SERBO-CROATIAN

9) 掲載順は, 原本通り, また表記も原本通り大文字とした。

SPOKEN ARABIC (SAUDI)	SPOKEN HINDUSTANI	SPOKEN SINHALESE
SPOKEN ARMENIAN	SPOKEN HUNGARIAN	SPOKEN SPANISH
SPOKEN BULGARIAN	SPOKEN INDONESIAN	SPOKEN SWAHILI
SPOKEN BURMESE	SPOKEN ITALIAN	SPOKEN SWEDISH
SPOKEN CAMBODIAN	SPOKEN MODERN ITALIAN	SPOKEN TAGALOG
SPOKEN CANTONESE	SPOKEN JAPANESE	SPOKEN TAIWANESE
SPOKEN CHINESE	SPOKEN KOREAN	SPOKEN TELUGU
SPOKEN DANISH	SPOKEN MALAY	SPOKEN THAI
SPOKEN DUTCH	SPOKEN NORWEGIAN	SPOKEN TURKISH
SPOKEN FINNISH	SPOKEN PERSIAN	SPOKEN URDU
SPOKEN FRENCH	SPOKEN POLISH	SPOKEN VIETNAMESE

以下は、筆者が2013年10月から11月にかけて調査した結果、金城学院大学、南山大学、の両図書館に所蔵されていた17言語である。著者と合わせて紹介したい。

表 3. 【Spoken Language Seriesのタイトルと著者<sup>10)</sup>】

Title	Author
Spoken Japanese	Bernard Bloch& Eleanor Harz Jorden
Spoken Burmese	William S.Cornyn
Spoken Chinese	Charles F. Hockett,Lt.A.& ChaoYing Fang
Spoken Danish	Jeannette Dearden&Karin Stig-Nielsen
Spoken Dutch	Leonard Bloomfield
Spoken Greek	Henry and Renee Kahane&Ralph L.ward
Spoken Hindustani	Heinrich Hoenigswald
Spoken Hungarian	Thomas A. Sebeok
Spoken Italian	Vincenzo Cioffari
Spoken Korean	Fred Lukoff
Spoken Malay	Isidore Dyen
Spoken Norwegian	Einar Haugen
Spoken Portuguese	Margarida F. Reno& Vincenzo Cioffari
Spoken Russian	Book One:I.M.Lesnin and Luba Petrova Book Two:Leonard Bloomfield and Luba Petrova
Spoken Spanish	S.N.Trevino
Spoken Thai	Mary R.Haas&Heng R.Subhanka
Spoken Turkish	Norman A. Mcquown&Sadi Koylan

これらの著者はアメリカの構造主義言語学者が多くを占めており、Blochを含め4人の論文が*Reading in Linguistics I*に掲載されている。それぞれの著者がどのような人物であったのか、Spoken Language Seriesはその後、各国で各言語教育にどんな影響を与えたのか非常に興味深い、そのことは今後の研究課題としたい。

Spoken Language Seriesは、どれもよく似た構成になっている。筆者はこれまでに確認できたSpoken Series 17言語についてその構成を調査した。このうち*Spoken Greek*は愛知県内ではPART THREEからしか所蔵されていなかったため、*Spoken Greek*をのぞく16言語について、Unit 1 からUnit 12までの内容をまとめたものが178～179ページの表4である。

10) 掲載順は、SJを除き、言語のABC順である。



【表 4 SPOKEN LANGUAGE SERIES 全体の構成】

Title	Spoken Japanese	Spoken Burmese	Spoken Chinese	Spoken Danish
Author	Bernard Bloch	William S. Cornyn	Charles F. Hockett	Jeannette Dearden
	Eleanor Harz Jordan		ChaoYing Fang	Karin Stig-Nielsen
Contents	[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]
	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND	Unit I . GREETINGS AND SIMPLE PHRASES	Unit 1. GETTING AROUND
	Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit II . COUNTING; TIME AND MONEY	Unit 2. MEETING PEOPLE
	Unit 3. TRADES AND OCCUPATIONS	Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?	Unit III . MEETING PEOPLE	Unit 3. WHAT'S YOUR JOB?
	Unit 4. ABOUT THE HOUSE	Unit 4. FAMILY AND FRIENDS	Unit IV . FAMILY AND FRIENDS	Unit 4. FAMILY AND FRIENDS
	Unit 5. THE WEATHER	Unit 5. THE WEATHER	Unit V . HANDLING THINGS	Unit 5. SEEING THE SIGHTS
	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW	Unit VI . REVIEW	Unit 6. REVIEW
	[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]
	Unit 7. COUNTING	Unit 7. A PLACE TO LIVE	Unit VII . WHERE DO YOU WORK?	Unit 7. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER
	Unit 8. ASKING DIRECTIONS	Unit 8. GETTING CLEANED UP	Unit VIII . A PLACE TO LIVE	Unit 8. GETTING A ROOM
	Unit 9. MORE NUMBERS	Unit 9. LET'S EAT	Unit IX . GETTING CLEANED UP	Unit 9. LET'S EAT
	Unit 10. THE FAMILY	Unit 10. SEEING THE SIGHTS.	Unit X . May-DungShi-Chywu	Unit 10. SHOPPING
	Unit 11. GETTING DRESSED	Unit 11. SHOPPING	Unit XI . Yi Tyan-Dzwo-De-Shr	Unit 11. GETTING CLEANED UP
	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW	Unit XII . REVIEW	Unit 12. REVIEW

Title	Spoken Korean	Spoken Malay	Spoken Norwegian	Spoken Portuguese
Author	Fred Lukoff	Isidore Dyen	Einar Haugen	Margarida F. Reno
				Vincenzo Cioffari
Contents	[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]
	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND
	Unit 2. INTRODUCING YOURSELF	Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit 2. MEETING PEOPLE
	Unit 3. THE FAMILY	Unit 3. TRADES AND OCCUPATIONS	Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?	Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?
	Unit 4. TALKING ABOUT THE WEATHER	Unit 4. ABOUT THE HOUSE	Unit 4. A PLACE TO LIVE	Unit 4. WHERE ARE YOU FROM?
	Unit 5. GETTING A ROOM	Unit 5. THE WEATHER	Unit 5. SEEING THE SIGHT	Unit 5. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER
	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW
	[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]
	Unit 7. GETTING CLEANED UP	Unit 7. SHOPPING	Unit 7. PAPER AND PENCIL	Unit 7. GETTING A ROOM
	Unit 8. GOING OUT TO EAT	Unit 8. LET'S EAT	Unit 8. SHOPPING	Unit 8. SPRUCING UP
	Unit 9. SEEING THE TOWN	Unit 9. A PLACE TO LIVE	Unit 9. SPRUCING UP	Unit 9. LET'S EAT
	Unit 10. SHOPPING	Unit 10. SPRUCING UP	Unit 10. LET'S EAT	Unit 10. SEEING THE SIGHTS
	Unit 11. TRAIN FOR PHYONGYANG	Unit 11. THE FAMILY	Unit 11. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER	Unit 11. SHOPPING
	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW



Spoken Dutch	Spoken Hindustani	Spoken Hungarian	Spoken Italian
Leonard Bloomfield	Heinrich Hoenigswald	Thomas A. Sebeok (Robert A. Hall, Jr )	Vincenzo Cioffari
[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]
Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND
Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit 2. MEETING PEOPLE
Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?	Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?	Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?	Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?
Unit 4. WHERE ARE YOU FROM?	Unit 4. SEEING THE SIGHTS.	Unit 4. WHERE ARE YOU FROM?	Unit 4. WHERE ARE YOU FROM?
Unit 5. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER	Unit 5. IN THE STORE	Unit 5. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER	Unit 5. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER
Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW
[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]
Unit 7. FINDING ROOMS	Unit 7. AN EVENING OUT	Unit 7. A PLACE TO LIVE	Unit 7. A PLACE TO LIVE
Unit 8. BARBER AND LAUNDRY	Unit 8. FAMILY DAYS	Unit 8. SPRUCING UP	Unit 8. SPRUCING UP
Unit 9. EATING	Unit 9. THE WEATHER	Unit 9. LET'S EAT	Unit 9. LET'S EAT
Unit 10. IN TOWN	Unit 10. SCHOOL	Unit 10. SEEING THE SIGHTS.	Unit 10. SEEING THE SIGHTS.
Unit 11. SHOPPING	Unit 11. TRAVEL	Unit 11. SHOPPING	Unit 11. SHOPPING
Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW

Spoken Russian	Spoken Spanish	Spoken Thai	Spoken Turkish
1: I. M. Lesnin and Luba Petrova	S. N. Trevino	Mary R. Haas	Norman A. Mcquown
2: Leonard Bloomfield and Luba Petrova		Heng R. Subhanka	Sadi Koylan
[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]	[PART ONE]
Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND	Unit 1. GETTING AROUND
Unit 2. THE FAMILY	Unit 2. MEETING PEOPLE	Unit 2. BUYING THINGS	Unit 2. MEETING PEOPLE
Unit 3. MEETING PEOPLE	Unit 3. WHAT'S YOUR TRADE?	Unit 3. MEETING PEOPLE	Unit 3. WHAT'S YOUR JOB?
Unit 4. WHERE ARE YOU FROM?	Unit 4. WHERE ARE YOU FROM?	Unit 4. FAMILY AND FRIENDS	Unit 4. FAMILY AND FRIENDS
Unit 5. THE WEATHER	Unit 5. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER	Unit 5. WHAT DO YOU DO FOR A LIVING?	Unit 5. LET'S TALK ABOUT THE WEATHER
Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW	Unit 6. REVIEW
[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]	[PART TWO]
Unit 7. AT THE AIRPORT	Unit 7. GETTING A ROOM	Unit 7. HOW DO YOU LIKE THE WEATHER?	Unit 7. GETTING A ROOM
Unit 8. LAUNDRY AND BARBER	Unit 8. SPRUCING UP	Unit 8. GETTING A ROOM IN A HOTEL	Unit 8. GETTING CLEANED UP
Unit 9. FINDING A ROOM	Unit 9. LET'S EAT	Unit 9. GETTING DRESSED	Unit 9. LET'S EAT
Unit 10. WRITING A LETTER	Unit 10. SEEING THE SIGHTS	Unit 10. LET'S EAT	Unit 10. SEEING THE SIGHTS.
Unit 11. EATING AND DRINKING	Unit 11. SHOPPING	Unit 11. A SHOPPING TRIP	Unit 11. SHOPPING
Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW	Unit 12. REVIEW

※掲載順は、SJ以外は言語のABC順

表4から明らかなように、PART ONEは*Spoken Chinese*を除く15言語においてGETTING AROUNDから始まる。Unit 2は、ほとんどがMEETING PEOPLEというタイトルである。Unit 3以降も、TRADE, FAMILY, THE WEATHER, WHERE ARE YOU FROMなど、どのテキストも似たような項目が並んでいる。PART TWOもGETTING A ROOM, LET'S EAT, SHOPPING, GETTING DRESSEDなど、こちらも似たような項目である。LET'S EAT,とSHOPPINGはほとんどの教科書に配置されていることも面白い。いずれも日常会話に直結する話題から構成されているのが特徴である。

次に、Spoken Series 16言語のUnit 2の構成(表5)を紹介する。182ページから185ページの表5をご覧頂きたい。こちらも非常によく似たものとなっている。

表5を見ると、どのテキストでも、まずBasic Sentencesが与えられる。次には、どのテキストでも必ず、Hints on pronunciationがある。3章でBlochの言葉を引用したが、こうした発音分析は、構造主義言語学の手法に基づいて諸外国語の音声的音素的分析を行った結果である。Basic Sentencesを十分に練習した後、Word StudyもしくはNotesという項目で文法説明がなされる。そしてWhat would you say? とWhat did you say?という2タイプの練習問題が用意されている。次にListening inで聞く練習をし、最後はFree Conversationで自由に会話ができるようになるまで練習するという構成になっている。

さきにも述べたが、日本語の発音が科学的に分析され、それが学習者に提示された教科書は、少なくとも日本語についていえば、Bloch以前にはなかったものである。Spoken Language Seriesでは日本語以外にも多くの言語の発音が分析され、Pronunciation Practiceという形で学習者に示された。もっとも他言語の発音分析が妥当なものであったかどうか筆者にはわからないが、少なくともSpoken Language Seriesの全ての教科書が発音を重視したものであり、この時代にあっては新しい教科書であったということは述べてもよいであろう。

また、練習問題、聞く練習は、Naganuma (1958)でも見られないものであり、画期的なものであったと言ってよいだろう。ただ、このことは、Naganuma (1958)が教室での使用を前提としたテキストであったのに対し、SJは学習者が独学で勉強できることを目指したテキストであったためだとも考えられる。

以上のような構成は、調査した16言語の教科書のほとんどに共通するものである。

また、表記も全てローマ字が採用され、かな、漢字、ハングル文字といったものは一切使われていないことも統一された方針である。

次に、Unit 1でどのようなBasic Sentencesが導入されているか考察してみたい。ここではページ数の関係で、BlochのSJ、Bloomfieldの*Spoken Dutch*、そして筆者が唯一学習した言語が中国語であることから、*Spoken Chinese*の3冊を取り上げ、導入されている文と対応する英語訳をまとめたものが186～187ページの表6である。

これもまたとてもよく似た導入順序となっていることがわかる。それは、おおむね次ページの表7のような順序である。ただし、こうした構成の類似は、あくまでもBloomfieldが編集を主導したことに起因するものであり、はじめに*Spoken Dutch*があつて、それが各言語に訳されたというわけではない。

【表 7：導入順序の比較】

	SJ	<i>Spoken Dutch</i>	<i>Spoken Chinese</i>
①日常生活でよく使われる挨拶	1. Ohayoo gozaimasu.	Goeden morgen!	Ní-'hǎw
②授業の中でよく使う文	18. Wakarimásu ka?	Verstaat u mij?	'Dǔng-bu · dǔng?
③「どこですか」	25. Ryooriya wa, dóko ni arimásu ka?	Waar is er en restaurant?	Fàn-'gwǎn · dz dzáy-'nǎ · lì?
④存在文「～にあります」	27. Koko ni arimásu.	Het is hier.	Dzáy-'jè · lì.
⑤「これは何ですか」	33. Nān desu ka?	Wat is het?	'Jè shǐ-shèm · me?
⑥「～がほしいです」	48. Pān ga hosii desu.	Ik zou graag en cigaret willen hebben.	Wō- yǎw-'yǎn

「レストラン」、「ホテル」、「たばこ」、「マッチ」の4語が3テキストともに使われているのは、軍人が外国に行った際すぐに必要となる語だと考えられたのだろう。

動詞文の導入が早いのは、*Spoken Language Series*に共通する特徴である。SJでは、Unit 1で動詞文Wakarimásu ka?のほか、過去形Wakarimásita ka?, 否定形Yóku wakarimasén desita, テ形Moo itido itte kudasáiといったものまで導入されている。また、Pān ga hosii desu.という形容詞文まで見られる。ただ「～が欲しい」という文は中国語では動詞文であることから、*Spoken Chinese*ではWō- yǎw-'yǎn'（我要烟）という文で登場している。

こうして比べてみると、*Spoken Language Series*は名詞文からとか動詞文からといった品詞にこだわった導入方法ではなく、日常生活に必要な文から次々に導入されたと考えられる。このことは*Spoken Language Series*の大きな特徴の一つである。Bloomfield (1942) は次のように述べ、外国語を逐一品詞に分類する分析手法を批判し、外国語は外国語として分析すべきだと主張したが、こうした導入順序はBloomfieldの方針を反映しているのだろう。

(5-1)

In all this work it is important to take the language on its own terms, and to avoid distorting and confusing the facts by false classifications derived from one's own language. A description of Malay or Tagalog that started out with parts of speech such as noun, adjective, verb, adverb, would be wrong from the start, and so would a description of these languages or, say, of Japanese or of Ojibwa, which tailed about 'cases' of nouns.

（拙訳）*Spoken Language Series*のすべてにおいて、言語をそれ自身の語法を通してみるのが大切であり、そして、自分の言語から派生した間違った分類によって、事実をゆがめたり混同するのを避けることが大切である。マレー語とタガログ語の記述は、名詞、形容詞、動詞、副詞のような品詞から始まるが、それはそもそも間違っている。そういう方法では、例えば日本語やオジブエ語のように名詞の格を付加させるような言語の記述においても間違ってしまうだろう。

Bloomfield (1942:15)

【表5 Spoken Language Series Unit 2の構成】

Spoken Japanese	Spoken Burmese	Spoken Chinese	Spoken Danish
Unit 2. Meeting People	Unit 2. Meeting People	Unit 2. Counting; Time and Money	Unit 2. Meeting People
[SectionA]	SectionA. Basic Sentences	Section A: Basic Sentences	SectionA. Basic Sentences
1. Basic Sentences	1. Basic Sentences	§1. Basic Sentences	1. Basic Sentences
2. Pronunciation Practice	2. Hints on Pronunciation	§2. Hints on Pronunciation	2. Hints on Pronunciation
3. Practice on the Basic Sentences	3. Check Yourself	§3. Practice on the Basic Sentences	3. Check Yourself
4. Review of the Basic Sentences: Covering the English		§4. Check yourself	
5. Notes			
6. Exercise			
7. Check-Up on the Exercise			
8. Review of the Basic Sentences: Covering the Japanese			
[SectionB]	SectionB. Word Study	Section B: Word Study	SectionB. Word Study
1. Basic Sentences	1. Word Study	§1. Review the Basic Sentences Covering the English	1. Word Study
2. Pronunciation Practice	2. Covering English and Burmese of Word Study	§2. Word Study	2. Covering English and Danish of word study
3. Practice on the Basic Sentences	3. Review of Basic Sentences	§3. What Would You Say?	3. Review of Basic Sentences
4. Review of the Basic Sentences: Covering the English		§4. What Did You Say?	
5. Notes			
6. Exercise			
7. Check-Up on the Exercise			
8. Review of the Basic Sentences: Covering the Japanese			
[SectionC]	SectionC. Review of Basic Sentences	Section C: Basic Sentences	SectionC. Review of Basic Sentences
1. Final Check-Up	1. Review of Basic Sentences	§1. Basic Sentences	1. Review of Basic Sentences
2. Listening In	2. Covering the English of Basic Sentences	§2. Hints on Pronunciation	2. Covering the English of Basic Sentences
3. Free Conversation	3. What Would You Say?	§3. Practice on the Basic Sentences.	3. What would you say?
	SectionD. Listening In	Section D: Word Study	SectionD. Listening In
	1. What Did You Say?	§1. Review of Basic Sentences Covering the English	1. What did you say?
	2. Word Study Check-Up	§2. Word Study	2. Word Study Check-Up
	3. Listening In	§3. What Would You Say?	3. Listening In
		§4. What Did You Say?	
		§5. Review of Basic Sentences Covering the Chinese	
	SectionE. Conversation	Section E: Listening In	SectionE. Conversation
	1. Covering the Burmese of Basic Sentences	§1. Word Study Check-Up	1. Covering the Danish of Basic Sentences
	2. Vocabulary Check-Up	§2. Listening In	2. Vocabulary Check-Up
	3. Conversation		3. Conversation
	SectionF. Conversation	Section F: Conversation	SectionF. Conversation

※掲載順は、SJ以外は言語のABC順

※データはいずれもH.Holt社のものを使用、大文字・小文字は見易さのため若干の修正が加えてある。

※Spoken Seriesは自習もできるように作られた教科書であるため、(Individual Study), (15minutes) などといった表記が所々に見られるが、そういった但し書きはこの表では省略してある。

Spoken Dutch	Spoken Hindustani	Spoken Hungarian	Spoken Italian
Unit 2. Meeting People	Unit 2. Meeting People	Unit 2. Meeting People	Unit 2. Meeting People
A. Basic Sentences	SectionA. Basic Sentences	SectionA. Basic Sentences	SectionA. Basic Sentences
1. Basic Sentences	1. Basic Sentences	1. Basic Sentences	1. Basic Sentences
2. Hints on Pronunciation	2. Hints on Pronunciation	2. Hints on Pronunciation	2. Hints on Pronunciation
3. Check Yourself	3. Check Yourself	3. Check Yourself	
B. Word Study	SectionB. Word Study and Review of Basic Sentences	SectionB. Word Study and review of Basic sentences	SectionB. Word Study and Review of Basic Sentences
1. Word Study	1. Word Study	1. Word Study	1. Word Study
2. Review of Basic Sentences	2. Covering English and Hindustani of Word Study	2. Covering English and Hungarian of word study	2. Covering English and Italian of word study
	3. Review of Basic Sentences	3. Review of Basic Sentences	3. Review of Basic Sentences
C. What Would You Say?	SectionC. Review of Basic Sentences	SectionC. Review of Basic Sentences	SectionC. Review of Basic Sentences
1. What Would You Say?	1. Review of Basic Sentences	1. Review of Basic Sentences	1. Review of Basic Sentences
2. What Did You Say?	2. Covering the English of Basic Sentences	2. Covering the English of Basic Sentences	2. Covering the English of Basic Sentences
	3. What would you say?	3. What would you say?	3. What would you say?
D. Listening In	SectionD. Listening In	SectionD. Listening In	SectionD. Listening In
	1. What Did You Say?	1. What did you say?	1. What did you say?
	2. Word study check-up	2. Word Study Check-Up	2. Word Study Check-Up
	3. Listening In	3. Listening In	3. Listening In
E. Conversation	SectionE. Conversation	SectionE. Conversation	SectionE. Conversation
1. Review of Basic Sentences	1. Covering the Hindustani of Basic Sentences		1. Covering the Italian of Basic Sentences
2. Vocabulary Check-up	2. Vocabulary Check-Up		2. Vocabulary Check-Up
3. Carring on Conversation	3. Conversation		3. Conversation
	SectionF. Conversation	SectionF. Conversation	SectionF. Conversation

Spoken Korean	Spoken Malay	Spoken Norwegian	Spoken Portuguese
Unit 2. Introducing Yourself	Unit 2. Meeting People	Unit 2. Meeting People	Unit 2. Meeting People
SectionA. Basic Sentences	[SectionA]	SectionA. Basic Sentences	SectionA. Basic Sentences
1. Basic Sentences	1. Basic Sentences	1. Basic Sentences	1. Basic Sentences
2. Hints on Pronunciation	2. Hints on Pronunciation	2. Hints on Pronunciation	2. Hints on Pronunciation
3. Check Yourself	3. Practice on the Basic Sentences	3. Check Yourself	3. Check Yourself
	4. Review of Basic Sentences: Covering the English		
	5. Commentary		
	6. Exercises		
	7. Check-Up on the Exercise		
	8. Review of Basic Sentences: Covering the Malay		
SectionB. Word Study	[SectionB]	SectionB. Word Study and review of Basic sentences	SectionB. Word Study and Review of Basic Sentences
1. Word Study	1. Basic Sentences	1. Word Study	1. Word Study
2. Covering English and Korean of Word Study	2. Hints on Pronunciation	2. Covering English and Norwegian of word study	2. Covering English and Portuguese of Word Study
3. Review of Basic Sentences	3. Practice on the Basic Sentences	3. Review of Basic Sentences	3. Review of Basic Sentences
	4. Review of Basic Sentences: Covering the English		
	5. Commentary		
	6. Exercise		
	7. Check-Up on the Exercise		
	8. Review of Basic Sentences: Covering the Malay		
SectionC. Review of Basic Sentences	[SectionC]	SectionC. Review of Basic Sentences	SectionC. Review of Basic Sentences
1. Review of Basic Sentences	1. Check-Up	1. Review of Basic Sentences	1. Review of Basic Sentences
2. Covering the English of Basic Sentences	2. Listening In	2. Covering the English of Basic Sentences	2. Covering the English of Basic Sentences
3. What would you say?	3. Conversation	3. What would you say?	3. What would you say?
SectionD. Listening In		SectionD. Listening In	SectionD. Listening In
1. What Did You Say?		1. What did you say?	1. What Did You Say?
2. Word study check-up		2. Word Study Check-Up	2. Word study check-up
3. Listening In		3. Listening In	3. Listening In
SectionE. Conversation		SectionE. Conversation	SectionE. Conversation
1. Covering the Korean of Basic Sentences		1. Covering the Norwegian of Basic Sentences	1. Covering the Portuguese of Basic Sentences
2. Vocabulary Check-Up		2. Vocabulary Check-Up	2. Vocabulary Check-Up
3. Conversation		3. Conversation	3. Conversation
SectionF. Conversation		SectionF. Conversation	SectionF. Conversation

Spoken Russian	Spoken Spanish	Spoken Thai	Spoken Turkish
Unit 2. The Family	Unit 2. Meeting People	Unit 2. Meeting People	Unit 2. Meeting People
SectionA-BasicSentences	SectionA. Basic Sentences	SectionA. Basic Sentences	SectionA. Basic Sentences
1. Basic Sentences	1. Basic Sentences	1. Basic Sentences	1. Basic Sentences
2. Hints on Pronunciation	2. Hints on Pronunciation	2. Hints on Pronunciation	2. Hints on Pronunciation
3. Check Yourself	3. Check Yourself	3. Check Yourself	3. Check Yourself
§4. Check yourself			
SectionB. Word Study	SectionB. Word Study and Review of Basic Sentences	SectionB. Word Study	SectionB. Word Study and Review of Basic Sentences
1. Word Study	1. Word Study	1. Word Study	1. Word Study
2. Covering English and Russian of Word Study	2. Covering English and Spanish of Word Study	2. Covering English and Thai of Word Study	2. Covering English and Turkish of Word Study
3. Review of Basic Sentences	3. Review of Basic Sentences	3. Review of Basic Sentences	3. Review of Basic Sentences
SectionC. Review of Basic Sentences	SectionC. Review of Basic Sentences	SectionC. Review of Basic Sentences	SectionC. Review of Basic Sentences
1. Review of Basic Sentences	1. Review of Basic Sentences	1. Review of Basic Sentences	1. Review of Basic Sentences
2. Covering the English of Basic Sentences	2. Covering the English of Basic Sentences	2. Covering the English of Basic Sentences	2. Covering the English of Basic Sentences
3. What would you say?	3. What would you say?	3. What would you say?	3. Word Study Review
			4. What Would You Say?
SectionD. Listening In	SectionD. Listening In	SectionD. Listening In	SectionD. Listening In
1. What Did You Say?	1. What Did You Say?	1. What Did You Say?	1. What Did You Say?
2. Word study check-up	2. Word study check-up	2. Word study check-up	2. Word study check-up
3. Listening In	3. Listening In	3. Listening In	3. Listening In
SectionE. Conversation	SectionE. Conversation	SectionE. Conversation	SectionE. Conversation
1. Covering the Russian of Basic Sentences	1. Covering the Portuguese of Basic Sentences	1. Covering the Thai of Basic Sentences	1. Covering the Turkish of Basic Sentences
2. Vocabulary Check-Up	2. Vocabulary Check-Up	2. Vocabulary Check-Up	2. Vocabulary Check-Up
3. Conversation	3. Conversation	3. Conversation	3. Conversation
SectionF. Conversation	SectionF. Conversation	SectionF. Conversation	SectionF. Conversation
		1. Conversation	1. Conversation
		2. Questions and Answers	2. Questions and Answers



【表6 Unit 1 Basic Sentencesの比較】

Spoken Japanese		Spoken Dutch
English Equivalents	Japanese	English Equivalents
1. Good Morning	1. Ohayoo gozaimasu.	Good day!
2. Good day or Hello	2. Koñiti wa.	Good morning!
3. Good evening	3. Koñbañwa.	Good evening!
4. How are you?	4. Ikága desu ka?	How are you?
5. I'm well	5. Gēñki desu.	Well, thank you.
6. I'm well as usual	6. Aikawarazu gēñki desu.	And (with) you?
7. Good-bye	7. Sayonára.	Quite well.
8. Excuse me or Pardon	8. Gomeñnasái.	Yes, msss.
9. Please	9. Dóozo.	No, sir.
10. Thank you	10. Arigatoo gozaimasu.	Please or if you please.
11. Don't mention it	11. Dóo itasimásite.	Thanks a lot.
12a. Yes.	12a Háí	Thank you, ma'am.
12b. or (another word for Yes)	12b Ēe.	You're welcome.
13. No	13. Iie.	Excuse me.
14. Please say it again	14. Moo itido itte kudasái.	So long!
15. Please speak slowly	15. Yukkúri hanásite kudasai.	Good-by!
16. Please speak more clearly	16. Móttö hakkíri hanásite kudasai.	Do you understand me?
17. Please wait a moment	17. Tyóttö mátte kudasai.	Do you understand what I say?
18. Do you understand?	18. Wakarímásu ka?	Will you please speak slowly?
19. Yes, I do understand	19. Háí. Wakarímásu.	I don't understand what you say.
20. No, I don't understand	20. Iie. Wakarimasēñ.	What did you say?
21. Did you understand?	21. Wakarímásita ka?	Where is it?
22. I understood perfectly.	22. Yóku wakarímásita.	Where is there a restaurant?
23. I didn't understand very well.	23. Yóku wakarimasēñ desita.	Where's the restaurant?
24. Where is there one?	24. Dóko ni arimásu ka?	Where is there a good hotel?
25. Where is there a restaurant?	25. Ryooriya wa, dóko ni arimásu ka?	Where's the hotel?
26. Where's there a toilet?	26. Beñzyó wa, dóko ni arimásu ka?	There's no good hotel here.
27. There's one here.	27. Koko ni arimásu.	Where's the station?
28. The railroad station's here.	28. Teisyaba wa, koko ni arimásu.	Where's the toilet?
29. There isn't any there.	29. Soko ni arimasēñ.	It's right.
30. There's one on the right.	30. Migi no hoo ni arimasu.	It's left.
31. The hotel's on the left.	31. Hóteru wa, hidari no hoo ni arimasu.	Go straight ahead.
32. There's one straight ahead.	32. Massúgu saki ni arimásu.	It's here.
33. What is it?	33. Nāñ desu ka?	Here it is.
34. What's this?	34. Kore wa, nāñ desu ka?	It's there.
35. That's a cigarette; Those are cigarettes.	35. Sore wa, tabako désu.	What is it?
36. That's a match; Those are matches.	36. Are wa, mátti desu.	What's that?
37. What's this building?	37. Kono tatémono wa, nāñ desu ka?	What's this?
38. That building's a hotel.	38. Sono tatémono wa, hóteru desu.	What do you want?
39. Are they [any] cigarettes?	39. Tabako ga arimásu ka?	I'd like a cigarette.
40. Yes, there are; or Yes, I have [some]	40. Háí. Arimásu.	I'd like some cigarettes.
41. No, there aren't [any].	41. Iie. Arimasēñ.	I'd like some matches.
42. Please give me a match.	42. Mátti o kudasai.	I'd like to eat something to drink.
43. Do you want it?	43. Hosii desu ka?	I'd like to drink something.
44. Yes, I do want it.	44. Háí. Hosii desu.	I'd like a drink.
45. No, I don't want it.	45. Iie. Hósiku arimasēñ.	Do you want coffee?
46. I'm hungry.	46. Onaka ga sukimásita.	I don't want any coffee.
47. Do you want some meat?	47. Nikú ga hosii desu ka?	I'd like some milk.
48. I want some bread.	48. Pāñ ga hosii desu.	How much is it?
49. I don't want [any] meat.	49. Nikú wa hósiku arimasēñ.	How much are they?
50. I want [some] fish.	50. Sakana ga hosii desu.	How much is that?
51. I'm thirsty.	51. Nódo ga kawakimásita.	One gulden.
52. Do you want [some] water?	52. Mizu ga hosii desu ka?	That's two gulden.
		What time is it?
		It's one o'clock.
		It's ten o'clock.
		What time does the movie begin?
		What time does the train go?
		When does the train to Amsterdam go?

Spoken Dutch	Spoken Chinese	
Dutch(Conventional Spelling)	English Equivalents	Chinese (Aid to Listening)
Goeden dag!	Good morning, good evening, hello, how are you?	Ni-'hǎw
Goeden morgen!	I'm fine.	Wō- hén-hǎw.
Goeden Avond!	How are you, sir?	'Shyān · sheng 'hǎw?
Hoe gaat het met u?	Is that OK?	'Hǎw-bu · hǎw?
Goed, dank u.	That's OK.	'Hǎw
En met u?	No, that's not OK.	'Bù-hǎw.
Heel goed.	Is that right?	'Dwèy-bu · dwèy?
Ja, juffrouw.	That's right!	'Dwèy · le.
Neen, mijnheer.	That's not right.	Bù- 'dwèy
Als 't u blieft.	Do you understand?	'Dǔng-bu · dǔng?
Dank u wel.	I understand.	'Dǔng le.
Dank u wel, mevrouw.	I don't understand.	Bù- 'dǔng
Niets te danken.	Where is it?	Dzày- 'nǎ · lì?
Neem me niet kwalijk.	Where's a restaurant?	Fàn- 'gwǎn · dz dzày- 'nǎ · lì?
Tot ziens!	Over there!	Dzày- 'nǎ · lì.
Dag!	It's not over there.	'Bù-dzày- 'nǎ · lì.
Verstaat u mij?	It's right here.	Dzày- 'jè · lì.
Verstaat u wat ik zeg?	Where's a hotel?	Fàn · 'dyàn dzày-'nǎ · lì?
Wilt u als 't u blijft langzaam spreken?	Where's the railroad station?	Hwō-chē- 'jàn dzày- 'nǎ · lì?
Ik versta niet wat u zegt.	The railroad station is right here.	Hwō-chē- 'jàn dzày- 'jè · lì?
Wat blijft u?	Where's the toilet?	Tsè · 'swō dzày- 'nǎ · lì?
Waar is het?	Thank you.	'Shyè · shyè.
Waar is er en restaurant?	Please.	'Chǐng
Waar is het restaurant?	Please, may I ask you...?	'Chǐng-'wèn.
Waar is er een goed hotel?	You're welcome.	Bù- 'kè · chí.
Waar is het hotel?	Excuse me, I'm sorry, or forgive me.	'Dwèy-bu · chí.
Er is hier geen goed hotel.	Go to the right.	Shyàng- 'yèw dzèw.
Waar is het station?	Go to the left.	Shyàng- 'dzwó dzèw.
Waar is de W. C. ?	Go straight ahead.	Yì · 'jǐ dzèw.
Het is rechts.	Please repeat.	Chǐng 'dzài-shwō
Het is links.	Please speak slower.	Chǐng 'màn · yì · dyan shwō
Ga rechttuit.	Please speak up.	Chǐng 'dà · shēng shwō
Het is hier.	What't this?	'Jè shǐ-shēm · me?
Hier is het.	That's a cigarette.	Nà-shǐ- 'yān
Het is daar.	What's that thing?	'Nà · ge-dǔng · shǐ shǐ- shēm · me?
Wat is het?	This thing is a match.	'Jè · ge-dǔng · shǐ shǐ-yáng · hwō
Wat is dat?	What do you want?	Ni-yàw- 'shēm · me?
Wat is dit?	I want cigarettes.	Wō- yàw-'yān
Wat wilt u hebben?	I want to eat.	Wō- yàw-chǐ- 'fàn.
Ik zou graag en cigaret willen hebben.	Do you want to eat some meat?	Yàw-chǐ- 'rèw-ma?
Ik zou graag cigareten willen hebben.	No.	Bù- 'yàw
Ik zou graag lucifers willen hebben.	I want to drink some tea.	Wō- yàw-hē- 'chá.
Ik wou graag wat eten.	Does he want water to drink?	Tā- yàw-hē- 'chá.
Ik wou graag wat drinken.	He won't drink water, he'll drink wine.	Tā- bù-hē- 'shwèy, hē- 'jyèw.
Ik wou graag drinken.	Is there a restaurant here?	'Jè · lì yèw-fàn- 'gwǎn · dz-ma?
Wilt u koffie drinken?	Do you have any matches?	'Yèw-méy · yèw yáng · 'hwō?
Ik wil geen koffie.	I don't, but he does.	'Wō méy · yèw, 'tā yèw.
Ik zou graag wat melk willen drinken.	Goodbye.	Dzày- 'jyàn.
Hoeveel is het?		
Hoeveel zijn zij?		
Hoeveel is dat?		
Een gulden.		
Dat is twee gulden.		
Hoe laat is het?		
Het is een uur.		
Het is tien uur.		
Hoe laat begint de bioscoop?		
Hoe laat gaat de trein?		
Wanneer gaat de trein naar Amsterdam?		

Basic Sentences の導入方法にどれくらい違いが見られるのか、同時代のNaganuma (1958) と比較してみたい。

BlochがSJのUnit 1 で導入したBasic Sentences 52個と、Naganuma (1958) のBasic Sentenceから始めの52個を取り出して比較したものが189ページの表8、使われた語を品詞別に分類したものが190ページの表9である。

表9からわかるように、Naganuma (以下、長沼と表記する) はかなり多くの名詞を導入している。一方、Blochは生活に必要な最低限の語のみを導入し、限られた語を繰り返し使っている。なるほど「戸」「かべ」という語より、「マッチ」「ホテル」という語の方が確かに実用的である。もっとも長沼の語の選択は、その教授法と深く関わりがあることは周知の事実である。動詞は長沼は1つ、Blochは6つ導入している。他方、形容詞は長沼は色を中心に5つ、Blochは1つである。動詞、形容詞もBlochは実用的な語を選んでいる。人称代名詞は長沼が4つ使っているのに対して、Blochは1つも使っていない。「わたしは魚が欲しいです。」「あなたは水がほしいですか。」とせず、「わたしは」「あなたは」を省いたのは、Blochが日本語を洞察した結果の表れであろう。1つの文の長さもSJは長沼より短い。これは、SJが人称代名詞を使っていないこと、またSJがBasic Sentencesを暗記させることを目的としたためだろうと思われる。人称代名詞の省略については、Unit 2のNotesで説明がなされている。

(5-2)

In Japanese, *watakusi* and *anāta* are used only when they are really necessary to make the sentence clear. If someone asks you, *Dōko kara kimāsita ka?* you know that means ‘Where did YOU come from?’ even though he has not used the word *anāta*; and if you answer, *Beikoku kara kimāsita*, he knows that you mean ‘I came from America’ even though you have not used *watakusi*.

(拙訳) 日本語では、「わたくし」と「あなた」は、文の意味を明らかにするために本当に必要なときにしか使われない。もしだれかがあなたに「どこから来ましたか」と聞いたら、それは例え「あなた」という語を使っていなくても「あなたはどこから来ましたか」ということを意味しているのである。もしあなたが「米国から来ました」と答えれば、例え「わたくし」という語を使っていなくても、相手には「わたくしは米国から来ました」という意味だとわかるのである。

Bloch&Jorden (1945c:33)

以上の考察から、Spoken Language Seriesは、その構成、文の導入順序がどれも非常によく似たものになっていることが確認できた。またBasic Sentencesはどの教科書も、教える言葉がコミュニケーションの実際を忠実に反映したものとなっていた。こうした構成の類似性は、繰り返しになるが、Bloomfieldの主導のもと、その編集方針に従って多くの言語学者がそれぞれに各言語の教科書を作成したためである。

【表8 Naganuma (1958) とSJ, Basic Sentencesの比較】

Naoe Naganuma (1958)	SJ
1. Kore wa [hon] desu.	1. Ohayoo gozaimasu.
2. Kore wa [isu] desu ka?	2. Koñniti wa.
3. Hai, sō desu.	3. Koñbañwa.
4. Iie, sō ja arimasen.	4. Ikága desu ka?
5. Sore mo [isu] desu ka?	5. Gēñki desu.
6. Dewa, [sore] wa nan desu ka?	6. Aikawarazu gēñki desu.
7. [Tsukue] desu.	7. Sayonára.
8. Are wa [to] desu ka, [mado] desu ka?	8. Gomeñnasái.
9. Kore wa [akai] hon desu.	9. Dóozo.
10. Kono kami wa [shiroi] desu.	10. Aríгато gozaimasu.
11. Sono kami mo [shiroi] desu ka?	11. Dóo itasimásite.
12. Iie, [shiroku] wa arimasen.	12a Háí
	12b Èe.
13. Donna [iro] desu ka?	13. Iie.
14. [Kuroi] desu.	14. Moo itido itte kudasái.
15. Kono [empitsu] wa donna iro desu ka?	15. Yukkúri hanásite kudasai.
16. Ano chiisai [hako] wa akai desu ka, aoi desu ka?	16. Móttö hakkíri hanásite kudasai.
17. Anata wa [seito] desu.	17. Tyóttö mátte kudasai.
18. Watakushi wa [seito] ja arimasen.	18. Wakarímásu ka?
19. [Anata] wa donata desu ka?	19. Háí. Wakarímásu.
20. [Tanaka] desu.	20. Iie. Wakarimasēñ.
21. [Kimura San] wa donata desu ka?	21. Wakarímásita ka?
22. Ano kata wa [Suzuki San] desu ka?	22. Yóku wakarímásita.
23. Anata no [otomodachi] desu ka?	23. Yóku wakarimasēñ desita.
24. Watakushi no [tomodachi] desu.	24. Dóko ni arimásu ka?
25. Ano kata wa kono gakkō no [seito] desu.	25. Ryoóriya wa, dóko ni arimásu ka?
26. Nan no [sensei] desu ka?	26. Beñzyó wa, dóko ni arimásu ka?
27. [Nippongo] no sensei desu.	27. Koko ni arimásu.
28. Bēkā San no okusan wa [Eigo] no sensei desu.	28. Teisyaba wa, koko ni arimásu.
29. Ano kata wa [Amerikajin] desu ka, [Igisujin] desu ka?	29. Soko ni arimasēñ.
30. Anata wa [Nipponjin] desu.	30. Mígi no hóo ni arimasu.
31. Kore wa [kutsu] de, kore wa [kutushita] desu.	31. Hóteru wa, hidari no hóo ni arimasu.
32. Kore wa watakushi no [hankechi] desu.	32. Massúgu saki ni arimásu.
33. Are wa donata no [kaban] desu ka?	33. Nāñ desu ka?
34. [Shimizu] San no desu.	34. Kore wa, nāñ desu ka?
35. Kono [mannenhitsu] wa anata no desu ka?	35. Sore wa, tabako désu.
36. Iie, [watakushi no] ja arimasen.	36. Are wa, mátti desu.
37. Sono [hon] to [zasshi] wa donata no desu ka?	37. Kono tatémono wa, nāñ desu ka?
38. Hon wa [Tomita] San no de, zasshi wa [Katō] san no desu.	38. Sono tatémono wa, hóteru desu.
39. Koko ni [tsukue] ga arimasu.	39. Tabako ga arimásu ka?
40. Soko ni [isu] ga arimasu.	40. Háí. Arimásu.
41. [Asoko] ni nani ga arimasu ka?	41. Iie. Arimasēñ.
42. [Doa] wa doko ni arimasu ka?	42. Mátti o kudasai.
43. [Soko] ni arimasu.	43. Hosíi desu ka?
44. [Tsukue] no soba ni arimasu.	44. Háí. Hosíi desu.
45. [Tsukue] no ue ni nani ga arimasu ka?	45. Iie. Hósiku arimasēñ.
46. [Hako] ga arimasu.	46. Onaka ga sukimásita.
47. Ikutsu arimasu ka?	47. Nikú ga hosíi desu ka?
48. [Hitotsu] arimasu.	48. Páñ ga hosíi desu.
49. [Hako] no naka ni nani ga arimasu ka?	49. Nikú wa hósiku arimasēñ.
50. [Isu] no shita ni nani ga arimasu ka?	50. Sakana ga hosíi desu.
51. Nanni mo arimasen.	51. Nódo ga kawakímásita.
52. Watakushi no ushiro ni [kabe] ga arimasu.	52. Mizu ga hosíi desu ka?

【表9 Naganuma (1958) とSJ, Basic Sentence初出52文で使われた語の比較】

	Naganuma (1958)			SJ		
名詞	本 何 まど 色 田中 鈴木さん 先生 奥さん イギリス人 靴下 清水さん 富田さん そば ひとつ かべ	いす 机 紙 箱 木村さん お友達 日本語 英語 日本人 ハンケチ 万年筆 加藤さん 上 中	そう 戸 えんぴつ 生徒 方 (かた) 学校 ベーカーさん アメリカ人 靴 かばん 雑誌 ドア いくつ うしろ	いかが 料理屋 右 左 何 建物 パン 水	元気 便所 方 (ほう) まっすぐ タバコ おなか 魚	一度 停車場 ホテル 先 マッチ 肉 のど
人称代名詞	わたし わたくし	あなた	どなた			
指示代名詞	これ この ここ	それ その そこ	あれ あの	ここ それ その	そこ あれ	これ この
形容詞	赤い 小さい	白い 青い	黒い	ほしい		
動詞	ある			言う わかる すく	話す ある	待つ かわく

※原文はローマ字書きだが、筆者が適宜漢字かな混じり文に直した。

※初出52文は、SJのUnit 1のBasic Sentencesが52個であるため、それに合わせた。

## 6. まとめ

本稿では、SJが成立した時代的背景を中心に考察してきた。その結果、SJは単独に企画されたものではなく、ほかに*Spoken Spanish*や*Spoken Chinese*など非常によく似た構成を持つ*Spoken Language Series*が存在することが確認できた。それらは、もともとはWar Department Education Manualというアメリカの軍人のために準備された膨大な教育用教材の一部であった。

*Spoken Language Series*はBloomfieldがその中心的役割を果たし、アメリカの構造主義言語学者が一丸となって作り上げたものであることも明らかになった。BlochのSJのほか、Bloomfieldの*Spoken Dutch*と*Spoken Russian*など、言語学者BlochやBloomfieldの教育上の業績を掘り起こすことができたのは、本研究の大きな意義である。

E.H.Jordenが日本語教育に著しい貢献をしたことは、日本語教育関係者の一部に認められるところであるが、その先駆けにBlochのSJの存在があることを認め、それをしかるべき位置に据えた上でアメリカにおける日本語教育史を記述する必要があると考える。

今後は、SJの独創性を明らかにしていきたい。BlochのSJには日本語分析への強い執着が感

じられ、日本語の構造を徹底的に分析している箇所が随所にみられる。例えばSJにおける助詞「に」や「の」の分類は、現在出版されている日本語教科書と比べて圧倒的に多い。こうした点は、Bloomfieldの方針にBlochが独自に加味した部分であろうと考えている。この点については次稿で詳しく述べる予定である。

＜謝辞＞本研究に際して、Spoken Language Seriesの画像掲載許可を快く下さいましたLinguistic Society of AmericaのExecutive Director であるAlyson Reed氏に深く感謝申し上げます。また、画像掲載に関して、多大なご尽力を頂きました京都産業大学図書館並びに金城学院大学図書館の皆様にご感謝致します。ありがとうございました。

[Reference]

(Spoken Language Series)

- Bloch, B. & E.H.Jorden (1945a) *Spoken Japanese Basic Course Units 1-12* (War Department Education Manual EM 561), The United States Armed Forces Institute
- Bloch, B. & E.H.Jorden (1945b) *Spoken Japanese Basic Course Units 13-30* (War Department Education Manual EM 562), The United States Armed Forces Institute
- Bloch, B. & E.H.Jorden (1945c) *Spoken Japanese Book One*, H.Holt
- Bloch, B. & E.H.Jorden (1946) *Spoken Japanese Book Two*, H.Holt
- Bloch, B. & E.H.Jorden (1945d) *Guide's Manual for Spoken Japanese: basic course units 1-30* (War Department Education Manual EM 563), The United States Armed Forces Institute
- Bloch, B. & E.H.Jorden (1972) *Spoken Japanese Book One*, reprinted of Bloch, B. & E.H.Jorden (1945a) *Spoken Japanese Book One*, Spoken Language Services,
- Bloomfield, L (1944) *Spoken Dutch Basic Course Units 1-12* (War Department Education Manual EM 529), The United States Armed Forces Institute
- Bloomfield, L (1944-1945) *Spoken Dutch Book One*, H.Holt
- Bloomfield, L. and Luba Petrova (1945) *Spoken Russian Book Two*, H.Holt
- Cioffari, V. (1946) *Spoken Italian Book One*, H.Holt
- Cornyn, W.S. (1945) *Spoken Burmese Book One*, H.Holt
- Dearden, J. & Karin Stig-Nielsen (1945) *Spoken Danish Book One*, H.Holt
- Dyen, I. (1945) *Spoken Malay Book One*, H.Holt
- Haas, M.R. & Heng R.Subhanka (1945) *Spoken Thai Book One*, H.Holt
- Haugen, E. (1947) *Spoken Norwegian Book One*, H.Holt
- Hockett, C.F. & ChaoYing Fang (1944) *Spoken Chinese Book One*, H.Holt
- Hockett, C.F. & ChaoYing Fang (1944) *Spoken Chinese Basic Course Units 1-12* (War Department Education Manual EM 506), The United States Armed Forces Institute
- Hoeningwald, H (1945) *Spoken Hindustani Book One*, H.Holt
- Kahane, H&R, & R.L. Ward (1946) *Spoken Greek Book Two*, H.Holt
- Lesnin, M and Luba Petrova (1945) *Spoken Russian Book One*, H.Holt
- Lukoff, F. (1945) *Spoken Korean Book One*, H.Holt
- Mcquown, N.A. & Sadi Koylan (1944) *Spoken Turkish Book One*, H.Holt
- Reno, M.F. & Vincenzo Cioffari (1944) *Spoken Portuguese Basic Course Units 1-12* (War Department Education Manual EM 512), The United States Armed Forces Institute
- Reno, M.F. & Vincenzo Cioffari (1946) *Spoken Portuguese Book One*, H.Holt

- Sebeok, T.A. (1945) *Spoken Hungarian Book One*, H.Holt
- Trevino, S.N. (1944) *Spoken Spanish Basic Course Units 1-12* (War Department Education Manual EM 509), The United States Armed Forces Institute
- Trevino, S.N. (1945) *Spoken Spanish Book One*, H.Holt
- unknown (1945) *Spoken Japanese: a manual and key for your spoken language course*, H.Holt  
(以上 Spoken Language Series)
- Bloch, B. (1949) Obituary notice: Leonard Bloomfield. *Language*, 25, pp.89-90
- Bloomfield, L. (1942) *Outline guide for the practical study of languages*. Baltimore: Linguistic Society of America, p.1, pp.15-16
- Darian, S.G. (1972) *English as a foreign language*. Oklahoma, OK: University of Oklahoma Press, pp.84-85
- Joos, M. (1971) *Readings in Linguistics I The development of Descriptive Linguistics in America 1925-56*, The University of Chicago Press.
- Naganuma, N. (1958) *Grammar and Glossary accompanying NAGANUMA'S BASIC JAPANESE COURSE*, Chofusha.
- Parrott, T.M.(1938) *Shakespeare Twenty-three Plays and the Sonnets* (War Department Education Manual EM 130), The United States Armed Forces Institute
- Shibatani, M. (1990) *THE LANGUAGES OF JAPAN*, CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS, pp.226-227
- Stern, H.H. (1983) *Fundamental concepts of language teaching*. Oxford: Oxford University Press, pp.157-158
- Howatt, A.P.R. (1984) *A history of English language teaching*. Oxford: Oxford University Press, pp.266-267
- 池田菜採子 (2012) 『Bernard Blochの活用論』金城学院大学大学院文学研究科国文学専攻提出修士論文
- 池田菜採子 (2013) 「B.Blochの活用論の成立—影響を与えた先駆者たち—」『金城学院大学論集2013年3月号』
- 池田菜採子 (2014) 「Bernard Blochが聞いた日本語—母音の無声化と脱落に焦点をあてて—」『金城学院大学論集2014年3月号』
- 太田朗 (1956) 「常識と学問」『英語教育 1956年3月号』開隆堂
- 佐藤喜代治 (1966) 「日本文法の研究法」『国語学 第六十六集』 p.2
- 関正昭・平高史也編 (1997) 『日本語教育史』株式会社アルク, p.98, p.202
- 高見澤孟 (2005) 「E.H.ジョーデン女史の日本語教育への貢献」『昭和女子大学女性文化研究所紀要 第32号』昭和女子大学, p.5, pp7-8
- 高見澤孟 (2006) 「日本語教育史 (7) 米国国内における日本語教育」『学苑・人間文化学科特集No.785』昭和女子大学, p.79, pp.82-85
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版, pp36-37
- 服部四郎 (1960) 『言語学の方法』岩波書店, pp.255-256
- 藤原雅憲 (2010) 「記述文法と教育文法の間—「の」と格闘したBlochに倣いて—」『平成22年度日本語教育学会第1回研究集会予稿集』(社)日本語教育学会, p.55
- 文化庁 (1971) 『音声と音声教育』財務相印刷局, p.37, pp.43-52
- 三上章 (1972) 『続・現代語法序説』くろしお出版, pp.23-24